



りぶ・らぶ・あにまるずシンポジウム2013
「PTSDとアニマルセラピー～その可能性を探る」
アローン・ワッサーマン氏をお招きして

- 主催:ヒトと動物の関係学会／日本総合的セラピー研究会／公益社団法人Knots
- 協賛:ネスレ日本株式会社 × ネスレピュリナ ペットケア
- 協力:国立大学法人兵庫教育大学
- 後援:外務省／イスラエル大使館／兵庫県／神戸市／社団法人兵庫県獣医師会／公益社団法人神戸市獣医師会／一般社団法人兵庫県医師会／神戸市医師会／日本動物高度医療センター

記録集

りぶ・らぶ・あにまるずシンポジウム 2013
「PTSD とアニマルセラピー～その可能性を探る」
アローン・ワッサーマン氏をお迎えして

日時：2013年6月23日（日）14：00～

場所：兵庫県民会館 福の間

- 目次 -

- ・ チラシ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- ・ 記録集 - 山口 修喜先生 - ・・・・・・・・・・・・ 4
- ・ 記録集 - 海野 千畝子先生 - ・・・・・・・・・・・・ 10
- ・ 記録集 - アローン・ワッサーマン先生 - ・・・・ 16
- ・ 記録集 - パネルディスカッション - ・・・・ 24
- ・ 抄録



りぶ・らぶ・あにまるず シンポジウム 2013

PTSD とアニマルセラピー ～その可能性を探る

— アロン・ワッサーマン氏をお招きして —

Live Love Animals Symposium 2013 – PTSD and Animal Therapy –
Explore its Potentials with Dr. Alon Wasserman

アロン・ワッサーマン氏は、イスラエルのテルアビブで活躍しておられる心理療法士です。イスラエルでは、地域の事情から、PTSD に苦しむ方も多く、ワッサーマン氏は、「PTSD に対するアニマルセラピー」を行い、イスラエルの大学で「心理医療現場に関わる人へのアニマルセラピー講座」を開かれています。今回、ワッサーマン氏が来日され、各地でご講演をされることとなりました。阪神・淡路大震災を経験し、PTSD についての課題を持つ神戸に於いても、ワッサーマン氏よりイスラエルの事例を学び、日本に於ける PTSD についての動物達の関わり方の可能性に付いて、皆様と考察を深め、今後の在り方に付いて歩みを進める契機と致したいと思えます。

2013年
6月23日(日)
兵庫県民会館
福の間
13時30分開場
14時開演

入場無料



プロフィール

アロン・ワッサーマン氏
Dr. Alon Wasserman

イスラエルのリハビリ臨床心理士 (PhD) であり、神経心理学者であり、動物介在セラピストである。彼は学生たちに指導するとともに、多分野のセラピストに実習を行っている。彼の興味はメンタルヘルスに対する動物の治療効果であり、それは 2000 年に PTSD と頭部外傷青年たちへの治療から始まった。それ以来、長年に渡って、対象となる患者層は広がっている。その経験を活かし、講義やセミナーを世界的に行い、イスラエルでは様々な学術機関で教えている。テルアビブのレピンスキー大学が彼の拠点である。イスラエル AAT 誌である「動物と社会」の編集委員でもある。日本でのレクチャーの中心となるのは、一般的な動物・特に犬を補助とした、成人・小児への PTSD に対する治療的実践である。ワッサーマン博士には、イスラエルや世界における AAT や AAE の組織的・社会的・経済的側面をご講義していただく予定である。

講演

アロン・ワッサーマン氏

*逐次通訳：津田望氏

山口 修喜氏

海野 千畝子氏

パネル ディスカッション

司会 **横山 章光氏**

パネリスト **アロン・ワッサーマン氏**
山口 修喜氏
海野 千畝子氏

主催 ヒトと動物の関係学会 / 日本総合的セラピー研究会 / 公益社団法人 Knots

協賛 **ネスレ日本株式会社**  **ネスレピュリナ ペットケア**

協力 国立大学法人 兵庫教育大学

後援 外務省 / イスラエル大使館 / 兵庫県 / 神戸市 / 社団法人 兵庫県獣医師会 / 公益社団法人 神戸市獣医師会 / 一般社団法人 兵庫県医師会 / 神戸市医師会 / 日本動物高度医療センター



山口修喜（やまぐち のぶき）
Nobuki Yamaguchi,
カウンセリングオフィス Pomu
Counseling Office Pomu

男性サバイバーとのドッグセラピー Dog Therapy with Male Survivors

はじめまして山口修喜と申します。今回は男性サバイバーとのアニマルセラピーについて。サバイバーというのは、性的虐待を過去に受けて生き抜いてきた方のことを言います。少年のころに性的虐待を受けて生き抜いてきたのが、男性サバイバーです。今回は、男性サバイバーについて、トラウマ回復について、そして、犬がどうその回復の役に立つのかを話します。

カウンセリングオフィス Pomu は日本で初めての、男性サバイバーのための相談センターです。2011年に設立され、1年で100人以上の方から相談を受けました。中学性から70代の男性もおられました。

私はBC州の公認心理カウンセラーとして、カナダのバンクーバーで5年にわたり男性サバイバーのカウンセリングに携わりました。このセンターは1990年に設立され、20数年で1万人の男性サバイバーの支援を行ってきました。バンクーバー周辺の人口は京都府くらいの規模。その規模に毎年、1億ほどの助成金がこのセンターに入ってきます。多くの金銭的に困難な人も支援を受けることが出来ます。20年たった今では10名ほどの男性サバイバー専門のカウンセラーが働いています。

少年への性的虐待は6人に1人とされており、少女は4人に1人とも言われています。日本では1000万人の男性サバイバーがいることとなります。悩んでいるかたの為には、カナダのような支援センターが必要だと感じます。

女性サバイバーと違う点は、男の子は被害を通過儀礼とみなすことがあります。周りからもラッキーだったな、などと言われることもよくあります。そして、被害を受けると性的な混乱も起こります。自分が男性なのか？自分は女性が好きなのか？などがあいまいになることもあります。

その他にも、サバイバー（男性に限らず）には以下のような傾向性がみられることがあります。怒りや恥などの強い感情、フラッシュバック、人との距離感、不信感、対人関係が恐怖、過覚醒や解離、依存。

次に、トラウマ回復について。トラウマを回復するにはまず準備が必要。心理教育やリソースという強みを育てる必要がある。いきなり過去のトラウマを語っても悪くなる可能性があります。

多重迷走神経理論は、サバイバーなどトラウマを受けた人が陥る過覚醒や解離のことを説明する。たとえば誰かに襲われると瞳孔が開き、心拍数が高くなる。神経のシステムは覚醒して、闘争、逃走反応が起きる。それでもどうしようもないときは、諦めてシステムがシャットダウン（解離）をおこなう。トラウマカウンセリングはその、上がったものを下げて、下がったものをあげることが大事になります。

もう一つ大事なことは身体感覚を感じる。何か胸のあったかい感じ、おなかあたりのぐるぐるした感じなどです。トラウマは身体に刻み込まれているので、最終的にそこにアクセスする必要がある。話すだけのカウンセリングでは、物事やトラウマを整理できても、人に対面した時に以上に緊張しすぎるなどの身体感覚はあまりよくなっていきません。今この瞬間、という感覚を大事にしていくことで、被害から何十年経っても「危険だ！」と脳内でアラームが誤作動しているのを鎮めることが出来ます。

カウンセリングオフィス Pomu では男性サバイバーと犬と一緒にカウンセリングを進めている。まず犬が緊張しているかもしれないクライアントを3匹の犬が向かい入れてくれます。ポメラニアンポム君、シーズーのトム君とノンちゃん。彼らを触ったり、みたりすることでトラウマ回復に必要な安心感が育ちます。

さらに、クライアントが過覚醒や解離した時には、犬が寄り添ったり、離れていったりなど何らかの反応をしてくれる。クライアントがそれを感じることで、自分自身の状態に気づくことがよくあります。

犬を触ったり、遊んだりすることによって、「今この瞬間」という感覚をセラピストがリードしながら育てていく。触っている時の感覚。眺めている瞬間の感覚。このようにトラウ

マセラピーというのは今の感覚を大事にしながら、リソース（資源）というようにいい感覚を育てていく。そうすることで自然とトラウマに向き合える状態になります。

怒りや悲しみなどの感情のプロセスにも犬が助けられることがあります。あるクライアントが犬を触っていると、その彼の顔を5分以上なめ続けた。彼はその後少し涙を流して、大切な人を失った気持ちを感じることができて少し安心できたと言った。犬が彼の悲しみを感じて「大丈夫だよ」と慰めてくれたのかもしれない。

男性サバイバーという大きなトラウマを抱えた方でも回復できていくのは、心理療法家とクライアントを介在してくれる犬の存在なのではないでしょうか。世界的にも注目されている動物介在療法。トラウマの回復のためのアニマルセラピーが広まってくれることを願っています。



【スライド2】



【スライド3】



【スライド1】



【スライド4】



【スライド5】

女性サバイバーとの違い？

CROWDER 1995

男性

- × 通過儀礼とみなす
- × 性の困乱

女性

- × 被害とみなす
- × 性の困乱？

【スライド 6】

多重迷走神経理論



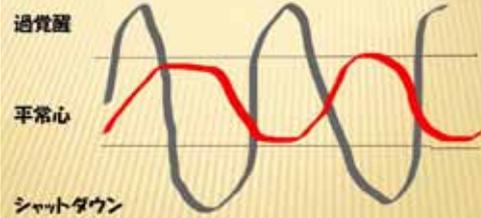
【スライド 10】

サバイバーの傾向性

怒いや恥などの強い感情
フラッシュバック
人との距離感
不信感
対人間係が恐怖
過覚醒や解離
依存

【スライド 7】

治療的な介入



【スライド 11】

書籍紹介



- 「男の子を性被害から守る本」
- 「性的虐待を受けた少年たち—ボーイズ・クリニックの治療記録」
- 「性暴力を生き抜いた少年と男性の癒しのガイド」
- 「少年への性的虐待」

【スライド 8】



【スライド 12】

トラウマ回復

3段階モデル (ハーマン, 1992)

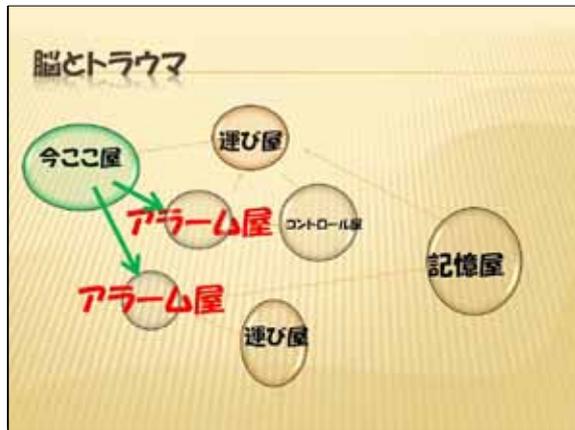
- 1 安全の確立 (準備)
- 2 想起と追悼 (トラウマ処理)
- 3 再結合 (意味づけ)

【スライド 9】

BOTTOM-UP PROCESS



【スライド 13】



【スライド 14】

安心感

「感じたことがない」
「教えてもらっていない」

【スライド 18】



【スライド 15】

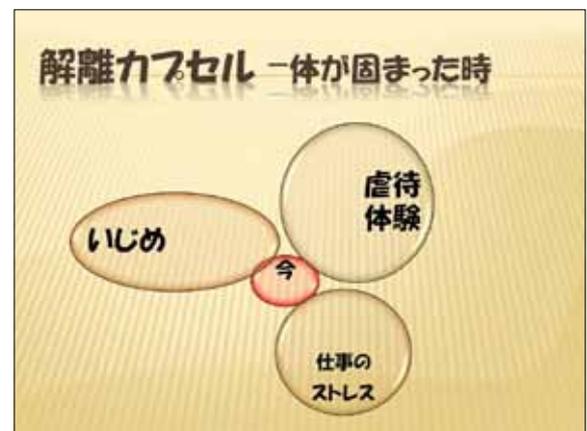
解離への対応

- ★ 犬の心臓の音を聞いてもらう
- ★ 犬を抱っこしてもらう
- ★ 犬と遊んでもらう
- ★ 周りを見てもらう

【スライド 19】



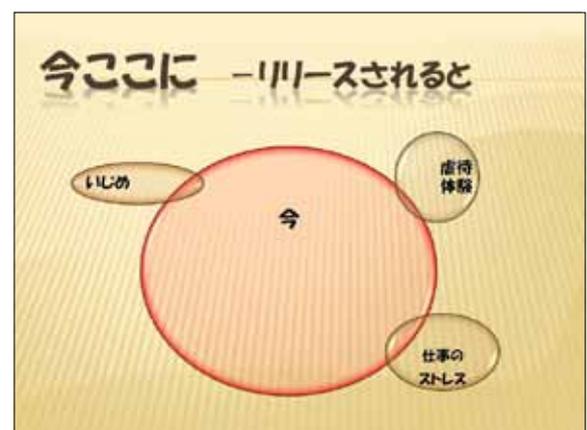
【スライド 16】



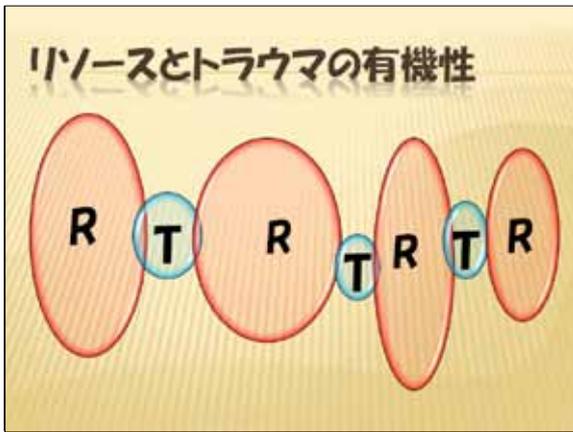
【スライド 20】



【スライド 17】



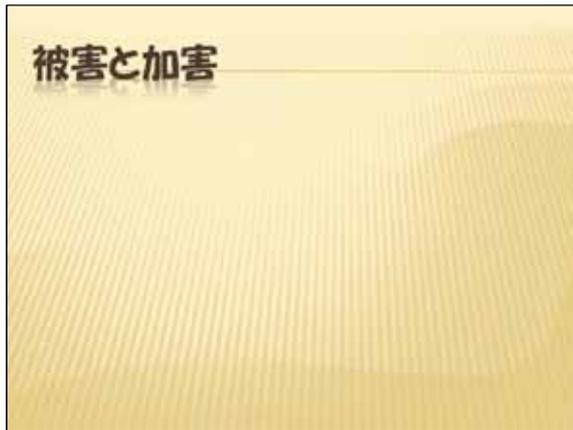
【スライド 21】



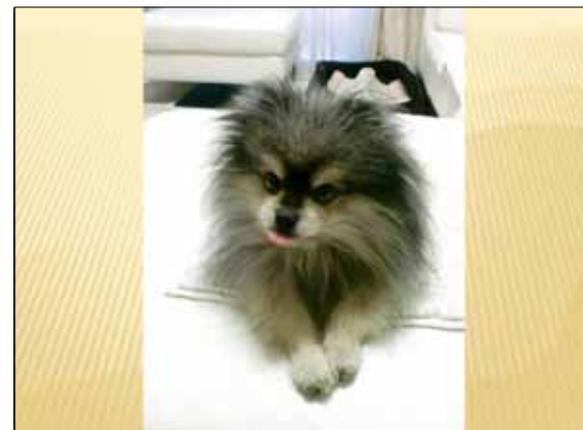
【スライド 22】



【スライド 26】



【スライド 23】



【スライド 27】



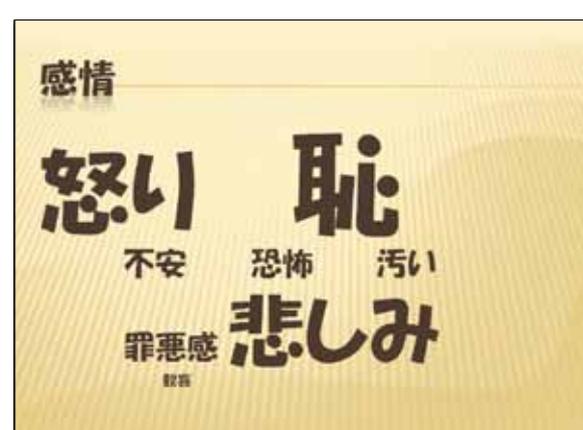
【スライド 24】



【スライド 28】



【スライド 25】



【スライド 29】

依存症

- ×ドラッグ
- ×アルコール
- ×過食
- ×セックス、マスターベーション
- ×忙しくする(過活動)



【スライド 30】

ご清聴ありがとうございました

カウンセリングオフィスPomu

- × 山口修喜
- × Nobuki Yamaguchi MA
- × 090-9622-4848
- × counseling@pomu.info
- × www.pomu.info
- × メルマガ登録できます

【スライド 34】



バウンダリー

壊れている
Noと言えない

【スライド 31】

まとめ

迎える
安心感
過覚醒と解離
今ここ

被害性と加害性
感情のプロセス
依存
バウンダリー

【スライド 32】

トラウマ、身体、解離などの参考文献

ピーター・リヴァイン(2008)『心と身体をつなぐトラウマ・セラピー』

バベット・ロスチャイルド(2009)『PTSDとトラウマの心理療法 — 心身統合アプローチの理論と実践』

バット・オグデン(2012)『トラウマと身体 — センサリー・モーター・サイコセラピー(SP)の理論と実践』

ジュディス・L・ハーマン(1996)『心的外傷と回復』

Onno van der Hart, Ellert R. S. Nijenhuis, Kathy Steele(2012)『構造的解離—慢性外傷の理解と治療— 上巻(基本概念編)』

【スライド 33】



海野 干畝子氏 Chihoko Unno

兵庫教育大学 人間発達教育専攻 臨床心理学コース 准教授

Hyogo University of Teacher Education, Graduate School of Education - Human Development Education, Clinical Psychology, Associate Professor

被虐待児への動物介在療法（ドッグプログラム） Animal Assisted Therapy (Dog Program) with Abused Children

兵庫教育大学の海野です。よろしくお願いいたします。

私は、虐待を受けた子供に対しての心理療法の研究を専門としておりまして、もともとは一般的なセラピーをやっていたわけですが、やはりたくさんの子供と接しているうちに、10分の4ぐらいが、ドロップアウトといって、治療から脱落していなくなってしまうわけです。それで、アローン先生のような、犬を使ってという形の工夫でより有用な心理療法ができるのではないか、ということで取り組みまして、大学教員でもあるものですから、そのエビデンスを出していくという意味で、今回は研究の一部を紹介させていただきながら、ドッグプログラムの手続等を御紹介いたします。そんなわけで、少し早口で話させていただきますが、御了承いただきたいと思っております。

また、レジュメが少し変わっていて、順番が変わっていたりだとか、あと、写真を多く取り入れたりだとか、事例の部分を追加したりだとかがありますので、少し戸惑われるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

それでは行きます。

初めに問題意識ということで、虐待児童への心理療法は、さまざまな方面からの実践が行われています。しかし、虐待児童が持つ特質に翻弄されて、有効で確固とした治療や支援方法は探索段階にあります。今回、私たちは、虐待を受けた子供の愛着形成を目的にした、犬による動物介在療法を実践したので、報告します。

愛着というのは、愛情を十分に受け入れて、それで成長していく、私たちに一番必要なものであり、心の中に母親が住んでいるとか父親が住んでいるとかということでもっているいろいろな挫折や苦勞に対して向き合える私たちがあるわけですが、虐待を受けた子供は、そういう素直な愛情を向けるとはねつけるとか、拒むとか、変な問題行動を起こすとか、ということになってしまっています。それを、犬の存在により何とかしたい、というところが問題意識としてあります。

研究仮説です。人的な皮膚接触で、過去のフラッシュバックに伴う恐怖や性的興奮が起きて、暴力的変質や性的加害、被害の連鎖が発生することがあります。しかし、私たちは、子供たちの心の回復に必要な健康な愛着形成に、健康なぬくもり、皮膚接触がなくてはならない、と考えます。それを、

犬の存在と接触を活用した動物介在療法が、虐待を受けた子供たちの愛着形成の構築に寄与するかということで、研究を始めました。

これがメカニズムの図です。私たちが子供をよよしというふうになさる、または施設職員さんがさわったりすると、子供たちは、虐待を受けてるものですから、お父さんにお股をさわられた感覚だとか、お母さんにぶたれた手の感じだとかというのがフラッシュバックして、途端に興奮してしまうわけです。それが暴力だったり、自分自身を傷つける自傷行為だったり、人への同じような性的な接触だったりすることになって、結果的に、人とのつき合いの中では、信頼関係を破綻したり、悪循環が起きたり、そういうふうな意味で、加害者からされてしまった虐待行為をほかの小さい子供たちにしてしまうようなことが起きます。

でも、犬の接触というのはどうでしょうというと、自分が犬をさわることになる。犬が寄ってくることもありますけれども、それは自分自身がコントロール感を取り戻すことができるという、アローン先生の講演のとおりだと思うんです。または、フラッシュバックもいい思い出とつながるフラッシュバックが出てくる。温かい子宮の中にいた、おなかの中にいた感じや、ふわふわやわらかい、かわいい、昔さわった犬、猫、ウサギというようなものが生み出されて、それが安心、信頼関係につながったり、健康な愛着が培われたり、体の感覚が、山口先生のお話のように、取り戻されたりということになるのではないかとことです。

これは、セラピードッグの交流の視点で、皆さんは御存じだと思いますけれども、デルタ協会が出している根拠に私自身がくっつけたものであります。中に、即時のラポールが可能だったり、安全なスキンシップ、そして、生理的な心拍数、血圧の低下によるリラックス、そして、過覚醒の解除という、山口先生のことです、エンターテインメント性、相互親役割、このエンターテインメント性とか笑い獲得、コミカルさとかですね。

それから、この5つ目は私自身がつくったんですけども、相互親役割、犬は子であり母であると。自分たちが世話をする存在でもあるけれども、自分たちが世話をされるような存在でもあるのではないかと、ということや、セラピー的なことをやることによって犬自身が誇りを獲得できるのではな

いか。

喪失感の補充、6番目ですね。場合によっては、亡くなられた方々のかわりになる存在になる、唯一無二の存在性になるのではなか。それから、7番目のスピリチュアルな存在であるという、私たちの五感以外の感覚というものを犬は持っているのではないだろうか。私たちが感じ取れない共感能力を持っていてくれて、そこをつなげてくれたりもするのではないかと思います。

そんなわけで、研究を始めようと思ったわけですが、余り先行研究が日本ではなかったものですから、まずは大学生に対して、虐待を受けた子供に成り代わってもらって、そこで、介入犬がいる中でどのような反応が起きるのかということ調査しました。それが22、23年度ですね。

と同時に、先ほど山口先生のお話にもありましたように、カナダのドリームキャッチャーという動物介在療法施設に行きまして、研修を受けたりしまして、動物介在療法の留意点、犬にとっての必要なこと、それからセラピーをする上での必要なことというものを発見しまして、実際に養護施設の子供たちに臨床面接をしています。その結果を、本日、報告したいと思います。やった内容というのは、事例研究、それから質的研究、量的研究という3つです。それを順に話していきます。

このスライドはちょっと違うと思うので画面のほうを見ていただきたいと思うのですが、目的です。対象施設の対象児童にドッグプログラムを実施し、ドッグプログラムの介入群とドッグプログラム介入なし群の比較を量的、質的に研究することにより、ドッグプログラムが児童の愛着形成に寄与するかを明らかにする。このプログラムが子供に、それをやった子とやらない子でどういうふうに差があるかということと比較したものです。実験群が3名、統制群が3名で、対象児童を小学生児童といたしました。

そして、その実験群、統制群ともに施設職員の方々にアセスメントをして、その児童の行動のチェックリストなんですけれども、特に愛着にとっても関連がある解離状態の症状がどのぐらいなくなったかというようなものについての調査をしました。各群に有意差が存在するかということなんです。

行った施設ですけれども、A県の郊外の住宅、緑に囲まれた場所に立地しています。同じ系列の中舎制の養護施設が隣接していますが、養護施設の中で子供が非常に強い問題行動を起こしていたりすると、情緒障害児短期治療施設という、さらに治療目的にする施設というものに今の日本では行くことになっているんですけれども、今回対象の施設は治療目的の情緒障害児短期治療施設です。

3つ目、これはとても大事だと思うんですけれども、施設が飼っている飼育犬がいるところを選びました。外飼いの柴犬風ミックスで、ジュニアという12歳の雌犬がいます。施設心理士は5人で、その施設心理士は生活にも介入していて、

研究者の以前の職場時代からのつながりがある施設でした。その施設の子供たちが私の職場に来てセラピーを受けたりしていたという経緯があります。

倫理的配慮です。犬は適性を発展されているということで、カナダのドリームキャッチャー、エリーンさんという臨床心理士であり動物評価者である方に評価を受けました。2つ目は、健康面で心配がないことを含む、獣医師からの健康診断書も持参した。3つ目は、大学の倫理委員会にて研究を承認してもらったということと、動物活用についての訪問許可を得ていること。4つ目は、当該養護施設の所属長と、それから児童本人に研究の意図を説明して、同意を得ました。こういうふうな手続が必要になってきます。

これがトムトムの適性合格証ですが、幾つかのテストをさせてもらって、適性はあるというふうに判断をされました。

ドッグプログラムの目的ですが、犬との触れ合い、タッチングを含んだ心理療法を実施することにより、児童が自己の体の感じ、身体感覚や気持ち、感情を確認し、愛着形成に必要な感覚統合を促進する目的です。感覚統合というのは、自分自身の体のまとまり、自分自身が今、ここにいる、どんな体の感じを持ってるか、どんな気分なのかということが自覚してわかっていけば、山口先生が言ったような、今、ここにいるということで、セラピューティックになるわけですがけれども、気持ちや感覚がどこかに飛んでいると治療的にならないわけです。

実施回数は全部で13回。2週間から4週間に1回で、構成は、グループプログラムと個人プログラムに大きく分かれています。最初と最後がグループプログラムです。真ん中が個人というサンドイッチのように挟んでいくような形態です。

グループプログラムの1回目の計画ですが、特設セラピールームで45分、丸椅子を人数分プラス担当者分、7つ用意して、1回目の目的はですね、トムトムとの適切な距離を学ぶ心理教育を行う、今後、トムトム介在療法の個人プログラムに入る構えをつくるということです。

児童のテーマとしては、トムトムと仲よくなろう、トムトルールを知ろうということですね。こんなふうに、ちょっと位置が、互い違いにして、職員さんと子供が並ぶ。この犬の顔のところに名前が書いてありまして、座るという形になります。真ん中にトムトムがいて、手前に自分がいて、ファシリテート、促進するということになります。

参加の同意書です。ドッグプログラムでは、トムトムと一緒に気持ちや体の感覚を学びます。ドッグプログラムでは、トムトムと一緒に今の心の状態を振り返ります。ドッグプログラムでは、トムトムと一緒に小さいときの自分が生きてきた歴史を振り返ります。ドッグプログラムでは、犬を信じることを学びます。人間を信じることはできないけれども、犬を信じてほしかった……ですね。ドッグプログラムでは、未来に希望が持てることを学びます。1から5に書いてあるこ

とを読んで、ドッグプログラムを私はやる、やらないというのを決めてくださいというふうに言うと、すぐにやるに丸をしてくれます。

ドッグプログラムのスケジュール、全13回。今、言ったグループプログラムが1回目で、個人プログラムが、1、トムトムと初めて面接を受けよう。好きな木の絵を書いてね。個人プログラム2、トムトムと心理検査を受けよう。体と心のまとめ、解離の検査をするよ。個人プログラム3、トムトムと赤ちゃん時代を振り返ろう。

個人プログラム4からは、この辺からちょっと人によって差があるわけです、順序のですね。赤ちゃん時代を長くやる子もいるし、時には短いエピソードでしかない場合もあります。その赤ちゃん時代に非常に親と離れた体験があれば、その悲しみや怒りというものを扱う必要があるの、長くなります。このあたりから、今度保育園、幼稚園時代を振り返ろうというのになって、ここの4から6というのに幅を持たせてあります。

そして、個人プログラム7から9だと、トムトムと小学校のころを振り返ります。そろそろ養護施設に来るとか、何らかの形で虐待体験とつながっていく話になるわけですが、このあたりは非常に子供たちも辛そうな形で表現することがあったり、プログラムに行きたくないって言ったり、面倒くさ、と言ったりとかということがあります。

個人プログラム10から11、トムトムと個人プログラムの卒業式をしよう、というちょっとセレモニー的なことをやって、卒業の準備をします。全部でこれだけしかないのあって、何とか面倒くさい気持ちを、あともう少し頑張ろうという形で励まし、乗り越えてもらうような感じに促しています。

最後は、また大勢になって、私と犬というお話をつくろう。未来に犬と一緒にいるところを絵にしてみよう。これは、未来に自分の犬と一緒にいるところを絵にしてもらいたいということです。グループプログラムの目的は今のよう形なんですけど、最終回が、児童が人生における未来の鑄型をつくるということで、とても大事にしてるのですが、トムトムとはここでさよならなんだと。でも、その後、いずれ自分は自分の犬を飼って、その自分の犬と生きていく、という未来の自分と犬との発展型というものを心のイメージとして作りたかったのですね。その犬のために、時にはつらい仕事も我慢しなければならない。ドッグフードを買うために、何とか今日を無事に生き延びて帰ると犬が迎えてくれるという楽しい体験を、いずれ彼らが感じる事ができたら、場合によっては、虐待という大変な辛い体験を乗り越えていけるのでないか、と私と犬というお話をつくろう、という風にしました。

1回目ですけれども、これは構えをつくるということですね。トムトムと挨拶、見てるとどんな感じかな、どんな気持ちになるかなと、かわいい気持ちとか、何か変な感じとか、いろいろ言うわけです。

トムトムは言います。こんにちは、私はトムトムです。トムトム、こんにちは、私は何とかですって言うてみよう。あなたに会えてうれしいよというふうに、これを言います。

タッチの仕方、さわり方、先生が先にやります。見ていてね。さわったらどう体感じたかな。どんな気持ちかな。さわるとさわさわした気持ちとか、やわらかい感じというふうに言ってくればいいんですけども、さわったらびくっとした気持ちとか、臭い感じとか、いろいろ言うわけですね。その辺が、やはりそのままトムトムを愛情として受けとめるのではなく、脅威なものだったりするところがあるんじゃないかと。

突然トムトムみたいな犬に会ったらどうしようか。さわってもいいですか、と飼い主さんに聞こう。これは学んだことですが、こういうふうに言うものですよ。

餌のあげ方。餌あげ、先生が先にやるから見ていてね。お座りの声かけをして、お座りしたら餌をあげよう。餌をあげたらどんな感じがしたかな。どんな気持ちかな。動物関係者の方だと、この辺は同じようなのかなと思うんですけども、やはりお座りという声をかけて、犬が座ってくれるというコントロールをしてくれるのは、アローン先生がおっしゃったような、自分自身のコントロールされた感じを取り戻すことができるので、自分の指示に従うというようなことをセラピーの前後に入れていました。

だっこの仕方。先生が先にやるから見ていてね。だっこするとどんな感じがしたかな、どんな気持ちかなということ、だっこも寝ながらこうやって犬を抱えた後に、起こして座った状態でだっこするというのもやったんですけども、後で話しますが、事例の子供は、その後、放心状態で1分間何もしゃべらなかつた。そのぐらい犬をだっこした感じというのが彼女にとって大きかったのだな、と理解しました。

リードを持って、歩き方ですね。これもリードを短く持ちますとか、ゆっくり歩こうとか、歩調を合わせる練習です。

そして、ついに個人プログラムに入っていくわけですが、このインテーク面接というのをやる。初めて面接は、結構普通の面接で、楽しい話から入っていくんですけど、だんだん家族の虐待が、どのぐらいパンチ、キックがあったかなとか、つらい話も聞くことになっているんです。そんなわけで、最初にもうトムトム、つらくなったり寂しくなったりしたらトムトムを見てね。……さわっていいんだよ、とセラピストが許可を与えておいて始まるわけです。

内容は、やはりウエルカムでトムトムが子供を迎えて挨拶をした後に、木の絵を書いたり等の作業をしながら話をききます。何かやりながらじゃないと子供は気分的に大変なので、インテーク（はじめて）面接をやりながらやってもらうわけです。次に心理教育を入れ込みます。犬についての心理教育でもあるのですが、他に、時にすごく自分が悪いというふうに思う、自分が悪いからパパは、ママは私を怒るんだとかというように言うので、あなたのせいではないよね、パ

パのする行動がやはり間違ってたと思うよ、というようなことを言って罪悪感の軽減のための心理教育をします。

資源の植えつけということで、山口先生がおっしゃったような、いい思い出というものをなるべく植えつけていきたい。EMDRというトラウマ処理だったり、RDIといって、リソースをもう1回頭の中に入れるような手法をとって、やってみました。

その後、コンテインメントですね、きょうの混乱をその場に置いておくためのコンテインメントの技法、イメージ療法だったり、ボディワークだったりを実施して、最後にまた餌あげ、だっこ、別れ際の握手をして終わるという手続きです。これを3人の子どもと3クール行いましたが、後ろで職員さんが見てくれます。こんな感じで、この男性がいるところは私で、女性の職員さんがいるところは子供というような形でやっていました。時に、子どもは寂しくなったり不安になったりするときには、トムトムをなでたり、さわったり、見たりするわけです。

職員さんは後ろ側のところでスタンバっててくれて、隣にスヌーピーもいます。トムトムにさわる前にスヌーピーじゃないと不安になる子もいまして、その縫いぐるみを真真中に挟んでいたり、職員さんが、寂しそうだったのでこうやって手を差し伸べると、さわらないで、って言ったりだとか、やっぱりするわけです。子供のほうから抱きついていったときには抱き締めてあげてくださいというふうな形で、ある程度静観してもらおうようなスタンスをお願いしました。

ドッグプログラムのルールというのがあって、自分にも犬にも人にもけがをさせない。物を大切にします。おもちゃをもとあったところに戻す、時間を守るということで、2番から4番までは普通の子供と、人間がやるようなものなんですけれども、一番最初のだけは、自分にも、犬にも、人にもというふうに、けがをさせないことを約束してもらいました。

これがトムトムの感情カードでして、ちょっと見にくいかなと思うんですけども、トムトムもいろんな気持ちになるんだと。あなたにもいろんな気持ちがあるよね。子どもは、言葉で最初から表現することはなかなかできないんですが、絵を指して、この絵と私の気持ちは一緒というふうに言うこととかもできるわけですね。それで、私のことをわかってほしい……。

これは結果です。CDCという子供の解離症状チェックリストにおいては、実施2カ月で陽性に、その後5カ月でさらに陰性になる変動が生じた。プログラム終了後、CDCの値は、介入群、結局そのドッグプログラムをやった群は、介入なし群、ドッグプログラムをやった群と比較して有意な差が生じました。次に、トラウマ症状のチェックリストがあります。介入対象児童が、主観的なドッグプログラム前後の評価においては、男性への恐怖、女性への恐怖が降下していったということで、男の人に対しての怖い気持ち、女の人に対しての怖い気持ちが最初あったのが下がっていったというこ

とです。

これがCDCですけれども、統制群の方がもともとの解離症状も高かったわけです。それを合わせてこなかったのがこちらのミスでして、介入群の終わった後と始まる前、介入無群の始まる前と終わった後の差があって、群間比較をすると、介入群のほうが差があるということがわかりました。

しかし、ドッグプログラム経過中の子供の解離チェックリストもやってみました。そしたら、最初は、一番最初の6月ですけれども、インテーク面接をしていながら、今度トラウマの話をし始めると、やはり解離の症状がば-んと上がるわけです。そして、終わった後、一応全部自分のことを話して、ドッグプログラムを終わった後に話すと、その症状がおりている、というような結果が出ました。

最後のグループプログラムでは、未来の犬と生きている絵を描いて、トムトムみたいに優しい犬と散歩しているところということで、描いてもらいます。

または、こういう絵もあります。お座りって言うてる絵ですね、ちょっと脅迫的で、突き詰めて全部名前を書いていますけれども、こんな感じで、顔もちょっと黄緑でいまいちだなど思いながらも、最初、この子たちが描く絵というのは、切り離されていて、目が片方なかったり、手がなかったり、というふうに欠損部分がとても多かったんですけれども、こうやってまとまった絵を描けたというのは1つの大きな成長なのかな、と自分は受けとめました。

やはりさよならというのは、非常に子供たちにとって弱いものです。そこで、子どもが自分の未来に自分の犬と生きるまでをどういうふうにつなげようかと想像しました。

その施設の犬も大きな存在として、そのセラピーの合間にジュニアのところに行ってトムトムって言うてみたりだとか、トムトムとジュニアがかわって、トムトムのところでジュニって言うてみたりとか、犬に愛着をもってくれました。この犬型フェルトのペンダントを施設職員さんがつくってくれて、最後、自分の犬と生きていくまで、これをドッグプログラムを乗り越えた記念品としてあげるということになりました。

それで、Aの解離症状の経緯ですけれども、これが解離症状なんですけれども、よくなったところをやりますと、生活記憶の忘却が、最初、開始時1が、途中1で、最後なくなってますが、生活記憶の忘却というのは、御飯を食べたのか、お風呂に入ったのか、宿題をしたのか覚えてない、と全部覚えられるようになったということ。技能の変動というのは、日によって算数の計算ができたりできなかったり、縄跳びができたりできなかったり、うまくしゃべれたりしゃべれなかったりというのがなくなった。退行現象というのは赤ちゃん返りですけども、これがなくなった。

明らかな証拠の否定というのは、これ、何々さんしたよね、これやっちゃったのあなたでしようって言うても、私はそんなことはしてない、いや、そんなことはないとか、あれはク

マがやったとかというふうに、否定して言っていたものが、それを私がやったと言えるようになった、ということです。

それから、自己の呼称の変化と。俺って言ったりとか、あたいって言ったりだとか、日によって自分自身を呼ぶ呼び名が変わるのもなくなった。

不定愁訴というのは、おなか突然痛くなったりだとか、気持ち悪くなったり、頭痛がするというようなこともなくなった。自傷行動というのは、爪を向いたりだとか、この辺を傷つけたりとか、リストカットをしたりとか、そういうようなことがなくなった。

解離性幻聴というのは、昔、聞こえていたお父さんの声だとか、お母さんの声だとかが多いんですけども、怖い男の人の声がするだとかというようなこともなくなった。

それから解離性幻覚は、白い服を着た女の人が見えなくなった。自分との会話、ひとり言みたいなものがなくなった。自分、もう1人のこの子がいるんじゃないかなというような感じのことがなくなったというような幾つかの症状の成長が見られたということです。

施設職員さんは、この対人関係においては、前は、誰にでも好きよとべたべたくっついていたところが、担当や特定の職員によく抱きつきに行くという、反応性愛着障害とって、誰にでも同じように自分自身を表現する、愛着を示してべたべたとくっつくところが、この人が自分にとって取っておきの人だということがわかり始めてきて、抱きつき方が変わる、甘える感じの抱きつき方がふえている、以前は言葉遣いが悪く、職員にも反感を買ってたのが、話し方が素直でかわいがられる。非を認めて謝罪、言いわけが減る。性的モードに切りかわって、性刺激に大笑いをしていたんですけども、性刺激からは距離をとる。それは気持ち悪いよ、だめだよと言ったり、やめる。自分のテンションの高さに気づく。あれ、私、今、変だったよねとか、私、今、声が高かったよねとかというような、自分自身を見る自分を深める。それから、トムトムみたいに優しい人になりたいと言ったり、寂しいと言ったり、将来の夢を話したりというような成長を見ることができました。

そこで、ドッグプログラムの特徴です。犬の存在に児童が慰められ、自己を投影し、トムトムに投影し、過去の不快記憶を塗りかえ、統合してまとめていくことができたのではないかと。犬との皮膚接触により、感覚統合、身体感覚がまとまってきた、不快耐性枠が広がり、嫌なことに対しても何とかしのげる、飛び出しても戻ってくるということができたのではないかと。

3つ目、犬と児童との関係性を管理するセラピストの資質は、犬との関係性、犬と児童の間にどう介入するかにより心理療法の質が左右される。アローン先生がおっしゃってたような形で、私たちがどう出るかによっていろいろにAATはバラエティーに富むんだらうな、と思いますし、つまり、犬に対して福利的なかかわり方をしていなければ、やはり児童

は同じような形で世界に対して向き合うだらうから、私たちと犬との関係性というのも非常に大事なんだらうなと思っています。

4つ目、これ、とても大事だと思うんですけども、観察者として、また、大きな構造枠として、施設職員の存在が児童の安全な生活の橋渡しになるということです。ある程度昔の記憶を扱っていったりすると、解離症状がひどくなるわけですね。そのひどくなったときに、それを説明する施設職員さんがいてくれるというのがとても大きいわけで、ほかの職員さんに、どうしてAちゃんはこういうふうになっちゃったんだらう、前は私の言うことは聞いていたんだけどな、と言ったりすることがあったわけです。けども、小さいときの、昔、ホテルにいたときの話をしているんだよということで、施設職員さんが、なるほどねと、それは寂しかった、今、甘えさせて、少し受けとめてあげてくれますかというような繋ぎをやってもらっているんですね。そうすると、新規まき直しということで、誰からもある程度自分を受けとめてもらえる環境ができるものですから、本人が安心して次に進むことができるということで、その理解してくれた職員さんがいた4者の中で私はやってきたわけですけども、大変助かったと思っています。

今後の課題です。今、1つの施設を抽出してやったわけですけども、今後、ほかの施設にもやってみたい。それから、犬がその施設にいる場合、いない場合があると思いますし、それから、今回は13セッションの構造的なストラクチャーがある決まったやり方をしたんですけども、アローン先生や山口先生のように、今後、無構造の心理療法を発展していく可能性を探索してみたいなと思っています。

以上です。御清聴ありがとうございました。

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

被虐待児童への動物介在療法 (ドッグプログラム)

情緒障害児短期治療施設での実践から

兵庫教育大学 海野千歌子
 中日青葉学園若葉館 石垣健郎
 カウンセリングオフィスPOMU 山口修喜
 Dreamcatcher Eileen BONA

【スライド1】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

セラピードッグ効用の視点

Delta Society(2007), Delta Society website. <http://www.deltasociety.org>

1. 受容・共感的素質を持ち、即時のラポール可能
2. 物理的な接触タッチのめくもり獲得 (安全なスキンシップ)
3. 生理的利点、心拍数・血圧の低下によるリラクセス(過覚醒の解除)
4. エンターテインメント性、しぐさ等で笑い獲得
5. 相互親役割(犬は子であり母である)と犬自身の幸福(犬の誇り:獲得)
6. 喪失感の補充、唯一無二の存在性
7. スピリチュアル(第6、7感)の存在

【スライド5】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

はじめに

- ・ 今日、被虐待児童への心理療法は、様々な方面からの実践が行われている。しかし、**被虐待児童がもつ特質に翻弄され、有効で確固とした治療や支援方法は探索段階にある。**
- ・ 今回演者らは、被虐待児童の愛着形成を目的にした犬による動物介在療法を実践したので報告する。

【スライド2】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

被虐待児童への動物介在療法研究の流れ

22、23年度 ■ 大学生への疑似面接 (質的研究)

24、25年度 ■ 被虐待児童への臨床面接 (質的研究)

■ カナダ・エドモントン 被虐待児童への動物介在療法施設「ドリームキャッチャー訪問」

■ AAT (事例研究・質的研究) 児童養護施設職員への調査 (CDC・量的研究)

■ 日本における動物介在療法による被虐待児の愛着形成の構築 (仮説)

AAT調査点発見

【スライド6】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

研究の仮説

- ・ 被虐待児童は、**人間的皮膚接触**で過去のフラッシュバックに伴う恐怖や性的興奮がおきて、暴力的噴出や性的加害被害の連鎖が発生することがある。
- ・ 被虐待児童の心の回復に、必要な健康な愛着形成には**健康な接触(めくもり)**がなくてはならない。
- ・ 犬の存在と接触を活用した動物介在療法が被虐待児童の**愛着形成の構築**に寄与するか、実証的研究を行う。

【スライド3】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

被虐待児童への愛着形成を目的とする動物介在療法に関する研究

1. 目的 対象施設の対象児童にドッグプログラムを実施し、ドッグプログラム介入群とドッグプログラム介入無群との比較を、量的、質的に研究することにより、ドッグプログラムが児童の愛着形成に寄与するかを明らかにする。
2. 方法: 対象児童を小学生児童とし、実験群3名、統制群3名に分け、実験群にドッグプログラムを実施する。実験群、統制群共に、職員らにアセスメント(CDC)をドッグプログラム開始前、終了時に実施する。各群に有意差が存在するかについて明らかにする。

【スライド7】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

犬接触が愛着信頼に繋がるメカニズム

人間の接触: お互いには必要不可欠に感じる。お互いにとって安心できる関係性(手のかき)

フラッシュバック: 虐待・虐待被害、虐待被害、虐待被害

被コントロール: ■ 信頼関係の構築 ■ 愛着形成の進行

犬の接触: 暖かい子猫の抱っこに似て、プフプフ、やわらかいかわいらしい音さむった犬の「囁く」ワザに

コントロール: ■ 安心、信頼関係の構築 ■ 健康な愛着形成樹立 ■ 健康な身体感覚の発生

【スライド4】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

対象施設について

- ・ A県の郊外。住宅と緑に囲まれた場所に立地。
- ・ 同じ系列の中舎の養護施設が隣接している。
- ・ 施設の犬(外飼の柴犬風ミックス、ジュニア12歳)がいる。
- ・ 施設心理士は5人。生活にも介入している。
- ・ 研究者の以前の職場時代からのつながりがある。

【スライド8】

倫理的配慮

1. 犬は適正を判定されている。
(動物評価者:カナダDreamcatcher Eileen Bona)
2. 健康面で心配のないことを含む獣医師からの健康診断書を持参した。
3. 大学の倫理委員会にて、研究(JSPS KAKENHI Grant Number24653195被虐待児童への愛着形成を目的とした動物介在療法に関する研究)と併に、動物活用についての訪問許可を得ている。
4. 当該養護施設所長等、児童の所属及び本人に研究の意図を説明し同意を得た。

【スライド 9】



【スライド 14】

トムトムの適性合格証



【スライド 10】

ドックプログラム参加の同意書について

1. ドックプログラムでは、トムトムと一緒に(いっしょ)に、気持ちやからだの感じを学びます。
 2. ドックプログラムでは、トムトムと一緒に(いっしょ)に、今のこころの状態(じょうたい)を振り返ります。
 3. ドックプログラムでは、トムトムと一緒に(いっしょ)に、小さい時の自分の生きてきた歴史(れきし)を振り返ります。
 4. ドックプログラムでは、犬を信じることを学びます。
 5. ドックプログラムでは、未来(みらい)に希望(きぼう)がもてることを学びます。
- 1-5にかいてあることを読んで、ドックプログラムを私は、やる、やらない、を決めてください。<Oでかこんでください。>
(なまえ) ()

【スライド 15】

ドックプログラムの目的と内容

1. 目的
犬との触れ合い(タッチング)を含んだ心理療法を実施することにより、児童が、自己の身体感覚や感情を確認し、愛着形成に必要な感覚統合を促進する。
2. 内容
 - 1) 実施回数、間隔 全13回実施 1/2W~1/4W
 - 2) 種類 あ) グループプログラム 1回目、最終回
い) 個人プログラム 2回目から12回目 全11回

【スライド 11】

ドックプログラムのスケジュール(テーマ)全13回

- 1) トムトムと仲良くなろう。
トムトムルールをしよう。
- 2) こじんプログラム1:
トムトムとはじめて面接(めんせつ)をうけよう。
すきな木の絵(え)をかいてね。
- 3) こじんプログラム2:
トムトムと心理検査(しんりけんさ)をうけよう。
からだところのままとまり(かいり)の検査(けんさ)をするよ。
- 4) こじんプログラム3:
トムトムと赤ちゃん時代(じだい)をふりかえろう。



【スライド 16】

グループプログラム1回目実施計画

1. 日時 平成X年〇月〇日() 15:30 ~ 16:15(45)分
2. 場所 治療棟 特設セラピールーム(丸椅子を人数分プラス担当者分、全7つ用意)
3. 目的
児童が犬(トムトム)との適切な距離を学ぶ心理教育を行うことで、今後動物(トムトム)介在療法の個人プログラムに入る構えを作る。
4. 児童のテーマ
 - あ) トムトムと仲良く(なかよく)なろう
 - い) トムトムルールを知(し)らう

【スライド 12】

ドックプログラムのスケジュール(テーマ)後半

- 5) こじんプログラム4~6:
トムトムと保育園幼稚園時代(ほいくえん、ようちえんじだい)をふりかえろう。
- 6) こじんプログラム7~9
トムトムと小学校のころをふりかえろう。
- 7) こじんプログラム10~11
トムトムとこじんプログラムの卒業式(そつぎょうしき)をしよう
- 8) グループプログラム2
わたしと犬というお話をつくろう。
みらいに犬と一緒に(いっしょ)にいるところを絵(え)にしてみよう

【スライド 17】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

グループプログラムの目的

1回目:児童が犬との適切な距離と関わり方を学ぶトレーニングをする。
 「トムトムと仲良くなろう」
 「トムトムルールを知ろう」

最終回:児童が人生における未来の鑄型をつくる。
 児童が将来の犬との関係性を絵に表わし作文する。
 「私と犬というお話を作ろう」

【スライド 19】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

ドッグプログラムのルール

1. じぶんにも犬にも人にもケガをさせない。
2. ものを大切(たいせつ)にする。
3. おもちゃはもとあったところにもどす。
4. 時間(じかん)をまもる。(45分間)

【スライド 28】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

ドッグプログラム1回目

1. トムトムとの挨拶(あいさつ)
 - みてるとどんなかんじかな? どんなきもちになるかな?
 - 「 」きもち「 」かんじ
 - 「トムトム、こんにちは、わたしは〇〇です。」といってみよう。トムトムはいいいます。「あなたにあえてうれしいよ」
2. タッチの仕方(しかた)
 - さわりかた:先生がさきにやります。みていてね。
 - さわったらどんなかんじしたかな? どんなきもちかな
 - 「 」きもち「 」かんじ
 - とつぜんトムトムみたいな犬にあたらどうしようか。
 - 「さわってもいいですか?」と聞いてみる(かいいぬし)にきこう。

【スライド 20】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

【スライド 29】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

3. エサのあげかた
 - えさあげ:先生が先にやるからみていてね。
 - おすわりの声かけをしておすわりしたら、エサをあげよう。
 - エサをあげたらどんなかんじしたかな? どんなきもちかな
 - 「 」きもち「 」かんじ
4. だっこの仕方(しかた)
 - 先生が先にやるからみていてね。
 - だっこするとどんなかんじしたかな? どんなきもちかな
 - 「 」きもち「 」かんじ
5. リードを持つ(も)ってあるきかた
 - 先生がやるからみていてね。リードをみじかくもちます。
 - リードもったらゆっくりにあるきましょう。
 - どんなかんじしたかな? どんなきもちかな

【スライド 21】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

結果 量的

- ・ CDC(子供の解離症状チェックリスト)においては、実施2か月で陽性に、その後5か月でさらに陰性になど等、変動がより生じた。
- ・ プログラム終了後のCDCの値は、介入群は介入無群と比較して、有意な差が生じた。
- ・ TSCC(トラウマチェックリスト)、介入対象児童の主観的なドッグプログラム前後の評価においては、男性への恐怖、女性への恐怖が、低下していた。

【スライド 30】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

個人プログラム実施計画

1. 目的 犬(トムトム)が介在する中で、虐待を受けた子どもへのインテーク(初回)面接を行い、児童の全体像を把握すると同時に、必要な心理教育を行う。
2. 児童のテーマ: トムトムとはじめて面接をうけよう。
職員引率入室
3. 当日の流れ
 - 1) 挨拶、トムトムとの挨拶
 - 2) 着席、インテーク面接導入(バウム園・人物園を描きながら)
 - 3) 必要に応じて心理教育、資源の受け付けEMDR
4. 終了時、コンテインメントとボディワーク実施。
5. トムトムと触れ合い(顔上げ、抱っこ、別れ際握手)
 <職員引率退室を児童が入れ替わり、3クール行う。>

【スライド 22】

兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

子どもの解離チェックリスト(CDC) 前後群間比較

| グループ | 前 (Before) | 後 (After) |
|--------------------------|------------|-----------|
| 介入群 (Intervention group) | 13 | 9 |
| 介入無群 (Control group) | 13 | 13 |

【スライド 31】



兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION

施設職員調査、A 対人関係結果

前 後

・道にでも行きよ〜とべたべたとくっつく

・嫌なことがあると職員に話す

・上級生、職員に対する言葉遣いが悪く反響まかう

職員に怒っている時に性的モードに切り替わる。性刺激に笑い声をあげる

・褒めてもらいたがる

担当や特定の職員によく話しかけに行く(一時、甘えるかまの顔つきが増える)

・くずする、こねることが多くなる

・甘える

・明るく職員に話しかかる

・上級生や職員への話しかけが減少、かわいがられる

・自分の声を認めて褒め、しゅくけが減る

・マイナス思考が激しく見受けられることがあった

・性刺激から距離をとる(口癖がテンションをあげてきた→戻りた声になり目元など言葉に、やめる)

・自分のテンションのコントロールが上手になる

・他者に話しかけてあげようとする。「優しい人になろう」という言葉

・辞書の学習を促す

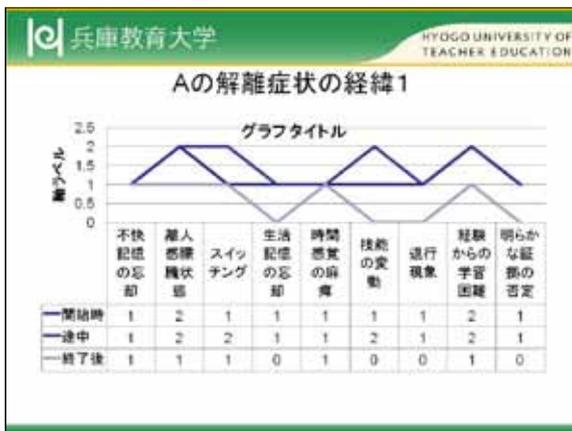
・「さびしりと言語化」

・ドッグの手紙を書き、次の予定確認を見ている。

【スライド 38】



- 兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION
- ### ドッグプログラムの特徴
1. 犬の存在に、児童は慰められ、自己を投影し、過去の不快記憶を塗り替え統合していく。
 2. 犬との皮膚接触により、感覚統合がおき、不快体制枠が広がる。飛び出しても戻ってくる。
 3. 犬と児童との関係性を管理するセラピストの資質は、犬との関係性、犬と児童の間にどう介入するかにより、心理療法の質が左右される。
 4. 観察者として、また大きな構造枠として、施設職員が存在が、児童の安全な生活の橋渡しになる。
- 【スライド 39】



- 兵庫教育大学 HYOGO UNIVERSITY OF TEACHER EDUCATION
- ### 今後の課題
- ・ 今後、ドッグプログラムを実施する調査対象人数や属性の工夫や増員をして、他の情緒障害児短期治療施設との比較、質的な利点や留意すべき課題を整理していく。
 - ・ 被虐待児童への構造的心理療法(ドッグプログラム)から、動物を介在した無構造的心理療法への発展の可能性を探索していく。
- 【スライド 40】





アロン・ワッサーマン博士 Dr. Alon Wasserman
リハビリ心理士／動物介在セラピスト：イスラエル
Rehabilitation Psychologist, Animal Assisted Therapist, Israel

自然災害の被災者

トラウマ後の患者の、セラピー犬との絆によるリハビリプロセス Nature Catastrophe Victims: The Rehabilitation Process of Post Traumatic Patients with the Aid of a Therapy Dog

こんにちは。

今日はこうしてみなさんと一緒に話せることを楽しみに
思っています。横山・津田先生に日本に呼んでいただき
ありがとうございます。今からここで話すことは、私が15
年間クリニックで経験したことです。私は大学で教えるか
たわら、自身の心理クリニックでカウンセリングを行って
います。患者さんたちはイスラエルの防衛軍の部署から
も送られてきます。私の患者は子どもから成人まで幅
広く、今日はいくつかのケースについても話します。
通常の私の患者は、日常的な小さな問題から、PTSD
のような重い人まで、毎日接しています。

このプレゼンテーションでは、ある事件や事故のあとに、
人生が一変した患者さんに、犬が治療的に役立った
ケースをお話します。まず最初に、一般的なPTSDに
ついての内容、そのあとは大きく人生が変わった
ケースについてお話します。それからセラピー
ドッグとして、診察室の中にいる犬の役割
について話します。

私の飼っているナラとチカは、私の共同コンパニオン
でもあります。黒い犬はナラですが、私の親友
でもあります。先ほどのお話にあったように、
自分の犬をこうやって写真で見ると、今、
自分の不安が下がります。私のペットたちの
力によって、私の仕事がほとんどなされて
いると言ってもいいぐらいです。私は2匹の
セラピー犬と1匹の猫を飼っています。これ
は心理の専門分野にとっても非常にユニーク
なことです。

私はイスラエルのレブンスキー大学で動物介在療法
について教えています。学生は何らかの学士
を持った人たちで、授業内容は心理学、動物
学、人と動物の関係学、セラピーの実習を
組み合わせ、最低2年間行い、修了書を出
します。

私は中東の小さな国イスラエルからきました。
私たちはユダヤ人ですが、初めはこの地に
住んでいましたが、世界中にばらまかれ
ました。それからこの地に戻ってきた民
族です。イスラエルは800万人の国で、
日本と比べるととても小さな場所です。
民族構成は、ユダヤ人は75%、アラブ
人が20%、そのほかの民族が5%ぐ
らいです。公用語はヘブライ語とアラビ
ア語です。交通標識などはこの2つに英
語が加わります。

もともとユダヤ人は、カウンセリングやセラ
ピーの世界で

たくさんの人が活躍しています。フロイト
やエリクソンなど、皆様もご存じでしょ
う。これらは全てユダヤ人です。またア
ニマルセラピーの分野においても、有
名な人々にはユダヤ人が多くいます。
アニマルセラピーの元祖であるボリス
・レビンソンや、グリーン・チムニー
ズのサミュエル・ロス、ゲイル・メル
スンもユダヤ系です。

イスラエルでは安全上の問題があります。
市民には軍隊の義務があり、戦闘場
面に行き、PTSDになって帰ってきた
人もたくさんいます。普通に暮らして
いる市民でも、テロが起こったりや
ミサイルが飛んできたりして、PTSD
になることもあります。多くのイス
ラエルの人がPTSDです。

DSM-IVというアメリカの「精神障
害の診断と統計の手引き」がありま
すが、PTSDは不安障害の中に含ま
れています。PTSDは以下から構成
されています。何度も思いだしたり
夢に見たりする「再体験」。トラウ
マを思いださないように延々と「回
避」する、例えばバスの中で爆弾が
爆発した、そのあとはバスに、バス
の横でさえ怖がる。「過覚醒」のた
めに睡眠がとれなくなる。また、鬱
状態なども出現しますし、入眠や
睡眠も難しい。いらいらしたり怒
りやすくなる。PTSDの引き金に
は大きな事件があるのです。他の
不安症状とは異なり、不安そのもの
が中心となります。悪夢やフラッ
シュバックについてですが、フラッ
シュバックは重い感情反応を引き
出すことがあります。精神的無感
覚です。PTSDの多くの人たちは
「感覚を無くした」と口にします。
日々のことに次第に興味が薄れ、
「自分を愛している、愛されている
人」から離れ、孤立し、楽しい活
動への参加も難しくなります。引
きこもっていきます。PTSDに陥
った人は、トラウマに陥った環
境を避けるようになります。感情
表現ができなくなったり、家族や
友達など近い友人から離れるよ
うになります。そのほかの症状と
しては、PTSDの犠牲者はたえず
びりびり、びくびくしており、暴
力的となり、集中力が減退しま
す。毎日疲労感と戦っているの
です。

自然災害についてです。2011年
に東日本では大震災と大津波など
が起こりましたが、神戸では1995
年1月17日の大地震によって、
多くの人たちが犠牲になったと聞
いています。こういう自然災害にお
ける影響の特徴は、戦闘区域とか
ではなく、普段に暮らしている通
常の人たちに生じてしまう、とい
うことです。もちろん、PTSDとい
うのは個々の疾患で

すが、現場に居合わせた人たちも、集団で同じような体験をします。さまざまなことに対するサポートが必要になるのです。心理的には、治す必要のある抑うつ症状が出ることもあり、ときに投薬が必要となります。行動が変わることもあります。患者には、コントロールが必要な回避や攻撃症状が出る場合があります。一般的ではないのですが、認知的な障害が出る場合があります。注意や記憶やいろいろな構成に障害が起こることがあるのです。認知障害をリハビリするには、家族や友人などの第三者の助けが何より必要になります。

PTSDに陥ると、サポートと支えが必要になります。次にその問題についての教育と説明が必要になります。トラウマに向き合うイメージやテクニックを教えるのです。同時にストレスをコントロールする必要を教えます。リラクゼーションのテクニックや認知的なことに対する、ストレスマネジメントです。

人間と動物の関係において、ペット、野生動物、セラピー動物など様々な動物がありますが、今回はセラピーに介在する動物との絆について話したい。

ウィルソンが提唱したバイオフィリア仮説によると、私たちが生存するために、同じ環境にいる動物たちの表情がシグナルとして入ってきているのです。現在この場所が、安全なのか？ 脅威なのか？ それを自然に我々は読み取っている・・・それがベースにあります。バイオフィリア仮説が意味することは、動物が安心して休息しているのを見たときに、我々は安心するのです。動物が安らいていると、我々が安らぐ。

患者が動物に与える影響についてですが、患者が落ち着いているときは、動物も落ち着いています。逆に患者が落ち着いていない時は、動物も落ち着いていないことが分かります。

どの動物がセラピーに適しているのでしょうか？ 事実、いろいろな可能性はあります。コミュニケーションにおいては、犬が知られていますが、猫や馬などとも豊かなコミュニケーションを取れるのです。この写真は、私の猫と一緒に写っている10歳の男の子です。犬というのは床の上に、つまり平面上にいますが、猫を用いると、犬と違った立体的な空間が現れます。猫は上に登ったり、他の棚に移動したりしますから。ですから患者に合わせて、犬や猫を使い分けています。

では他の動物と異なる犬の利点とは何なのでしょう？

第一に、犬は猫と違ってトレーニングできます。各セラピーに合わせて。猫にはそれができません。また、犬にはいろいろな体のサイズがあります。犬は、人間とコミュニケーションする事を喜ぶ動物でもあります。そういう意味では、ケージの中に入れて飼う動物とは異なります。ですから、犬は共同セラピストであり、セラピーに最適なのです。

私の研究の中心は、犬がいることで患者に幸福感を与えることです。犬がいると、ユニークな治療関係を作ることができます。これは、PTSDにもうまく応用できます。

さっきお話したボリス・レビンソンは、この分野の偉大

な父であり、ロス博士も素晴らしい人です。

彼らの精神を受け継いで、私とナラは、犬がいるとどういう治療的意味があるのか、いつも考えています。事実、犬というのは、セラピーに合わせてトレーニングし、「患者」「犬」「セラピスト」の三角形を作ります。

AATの場面では相互作用がこの三角形で成り立っているのです。私のクリニックでは、室内だけでなく、患者と庭に出たり、道路に出たり、セッションを柔軟にしています。

この三角形はセラピーの様々な場面で、目的によって深く関係してきます。例えばPTSDでは、日常生活でバスの移動が必要なのにバスが乗れない人がいます。そこに犬が一緒だと、バスに乗れるようになることもあります。他の例では、患者がとても興奮しているときに、犬に注意をそらせさせます。犬は患者の行動を真似したり、患者の行動から影響も受けます。共感性を学習、行動コントロールの学習にも用いることができます。もし患者の症状が後退している場合でも、犬と一緒に遊ぶだけのプレイセラピーもありうるのです。またセラピストが犬に気づかっているところを見せて、他者への気遣いのモデリングにも使えます。

では予防という観点からお話しします。世界中に救助犬が活躍しています。それとは異なり、セラピードッグは癒しのために存在します。救助犬は被災地で近いところまで行って助け出すのが仕事です。そういう犬たちのためにセラピードッグが必要なかもしれませんね。私のクリニックでは患者と犬と一緒に呼吸・リラクセスができるように工夫しています。コントロールマネジメントとして、リードを持って外で歩いたりします。不安が高い場合は、患者はそれを回避しようとしています。ですから私と犬は、現実から離れるように、セラピー室から外に出るようにしています。そのあと、私と犬と患者には、三角形でいい関係が築け、活動に進んでいくのです。

ペットの効用については言うまでもありません。もしPTSDが発症した時に、犬の存在は重要です。イスラエルのように人からの攻撃の場合、PTSD出現率は高く、その場合、犬はとてもいいと思います。先ほどの山口先生の話にもあったように、性的な虐待も人の攻撃からのPTSDと考えるとよいと思います。そういう患者さんに、犬を飼うように進めます。そういう場合は、「犬をペットショップで買わないで」「シェルターからもらってきて」と言います。

三角形の中でも、特に犬の反応（感情）に気づくことが大切です。多くのPTSDの患者はすぐに泣いてしまいます。その反応に対して、犬は自発的にアプローチします。そういう患者の膝に頭を乗せてきて、それで患者は共感や同情を学ぶのです。人間のセラピストの場合は、患者に対して言葉で表現したとしても、身体的な接触をしてはならない。患者を触ったりしては駄目なのです。しかし犬にはそれができます。私の犬について、ある患者は、「まるでアローンに抱きしめられているようだ」と言います。

PTSDの多くは、心理士のところに行く勇気もありません。私は多分、心理士に行くことは怖い体験なのだと思います。ところが患者は私の犬を見たときに、不安レベルが急激に下がります。患者の多くはトラウマのあと、最悪だったことを言葉に出したがりませんが、犬はそれを口にさせます。いろいろな場面でパニックを起こす患者は、人と共感するのが難しいのです。コントロールするのが難しい場合、犬を呼んで自分に従わせるのは効果的です。話している最中に犬を撫でているのもリラックス効果があります。

セラピー犬の価値は、感情を通わせられる生きた存在である、ということです。どんな状況でも愛を受け止めてくれ、安心感や愛情を与えてくれます。犬は撫でたり触ったり抱きしめられる存在です。共感することの大切さを教えてくれます。

そして何よりも愛情を教えてくれるのです。

ここで前半のレクチャーを終わります。

さて、後半です。ここからはケーススタディを話したいと思います。

初めはジョーという子どものケースです。

彼はとてもハンサムな6歳の知的な少年でした。彼の父親は、セラピーを開始する1年前に、交通事故で亡くなりました。彼には3歳の双子の妹がいます。彼の母親はいいひとなのですが、彼の乱暴な行動を抑えることができていませんでした。

この少年にはいろいろな問題がありました。一番の問題は感情の制御ができないということです。彼は父親がいないことがさびしかったのです。そして怒りを感じていました。彼は他の人の行動をコントロールすることにナーバスになっていました。彼の父親が死んだということは、彼のコントロールが効かないことです。彼はいろいろな人に、兄弟や母へも乱暴な行動を取っていました。彼はADHDではありません。私は臨床で、ADHDを良く知っていますが、彼らと彼の行動は全く異なりました。

私のクリニックに来る前に、母は他の心理士のところで3セッションだけ治療を受けさせましたが、彼は行きませんでした。彼が私のところにきたいと言ったのは、犬がいるからです。これは大切なことです。この少年はセラピーが絶対必要だが、セラピストのところには行きたがらなかったのですから。犬がいるから来た、というのは大きいのです。

一番はじめに私の所に来たときには、彼は私と関係性を持てませんでした。彼は私からの質問には答えないし、私がやることにも反応をしませんでした。ただ、私の犬と遊んでいましたが、それはそれは乱暴な扱いでした。犬を揺さぶったり、強く扱ったり。私はひやひやしていました。普通に撫でたり、みたいなことは全くしませんでした。ナラが傷つくこ

とはありませんでしたが、内心私は心配でした。20分間セッションを受けたあとに、彼は突然ドアを開けて「帰ろう」と母に言いました。

何セッションか後に、私は彼と、ナラの話をする関係を持てはじめました。彼からは短い言葉しかなかったのですが、内容はナラの事でした。彼を外に連れ出すために、ナラのトレーニング、ということを利用して連れだしました。犬、ジョー、セラピスト。3人が並んで歩きました。ジョーがリードを握りました。ナラが何かの臭いをかごうとすると、ジョーは紐を引っ張って、犬のコントロールをしようとしてきました。これはいい機会なので、私はそれに注意しました。「あなたが思っている通りじゃなくて、ナラがやりたいことをさせるべきなのでは？」と。彼がボールを投げる。ナラが持ってくる。彼はそれが好きでした。自分がナラをコントロールしているので気に入っていたのです。それはある意味で、そしていい意味で、人や状況をコントロールすることです。

次のステージに我々がしたのは、犬を連れて公園に行って、他の子どもと出会う、ということです。彼はナラをリードにつないで持っていました。他の子どもがそばに来て、犬を撫でたりしました。犬がいるおかげで子どもたちはジョーに対していい関係で来ます。しかしジョーは、他の子どもたちにもいい感じで接し返せません。他の子どもがせっかく来てくれたのに、乱暴な言動を出してしまいます。本当にいい機会なので、それをセラピーに生かして、ジョーを外に呼んで話しました。治療上、他の子どもたちを私のクリニックに実践として呼んでくることはできません。そういう意味では、外に出て他の子どもと接するような自然な状況を作ることを、動物がいると、できるのです。

徐々にセッションが進むにつれ、ジョーの犬に対する注目から、私への注目へとシフトするように試みました。ここまでジョーは、父親については全く語りませんでした。

次のステージで私が考えたのは、ナラを「連れてこないこと」です。ジョーに「来週はナラはこないよ」と言った。彼はものすごく怒って、「もしナラがこないなら、僕もこない！」と言いました。私はこう言いました。「分かった。来週ナラは来る。しかしその次の週はナラは来ないよ」犬のいないセッションで、彼はナラがいないことのみを私に伝えることができました。彼は精神下にある、ナラがいないことの感情を相手に伝えることができたのです。そして自分の感情を他者へ伝える、ということから父親の不在の感情を伝えることにシフトしていきました。

動物を使い続けるということから、動物の生命と人間の生命は平行線にあることが分かります。以前よりも私とジョーの関係性は深まりました。

犬を介在させたサイコセラピーの1年の間に、彼はいい子になっていきました。彼は精神的に安定し、コントロールも次第にできるようになりました。他の子どもも仲良くできるよ

うになってきました。家族との関係性もよくなっていきました。彼が精神的に安定したのは、目を外に向けられるようになったということで、それは、もともと彼が知的な子どもだったので、状況をよく理解できたためなのではないかと思えます。

2つめのケースです。

ダンさん。50歳の男性です。彼は結婚していて、3人の子どもがいるビジネスマンです。

彼はテロ攻撃を受けました。彼はテルアビブのレストランで座っていましたが、そこにテロリストがきて、銃乱射したのです。とっさに伏せた彼は、転がっていたピストルを持ち、テロリストを射殺しました。

ここには2つのトラウマがあります。

- 1) 彼が銃撃を受けたこと
- 2) テロリストを殺したこと

彼は重篤な PTSD になってしまいました。

彼の問題点は、感情的に不安と抑うつが重複していたことです。彼は以前やっていた活動を一切できなくなりました。家族の中でも、全ての人といざこざを起こすようになりました。

彼は精神科医にかかり、3セッションを受けましたが、服薬は拒否しました。精神科医は心理療法が必要であると判断し、週に家族セッション1回、個人セッション2回を予定しました。そこに私が関与したことになります。

彼は最初のセッションの中ではいらいらしていました。突然落ち込んだり、びくびくしたり。いつも泣いていました。ナラはそのときはまだいません。

私は二人のダンがいる、と考えました。「トラウマ前のダン」「トラウマ後のダン」です。

多くの PTSD 患者は、その事件後に、「自分が違った人間になった」と考えます。そしてセッションにナラがだんだんと入ってくるようになりました。

私はここで「3番目のダン」を提示しました。トラウマ前、トラウマ後のダンではなく、「生まれ変わったダン」です。それを目標としました。

ダンは、トラウマに遭う前からいい夫ではなかったのです。いい父親でもありませんでした。彼は次第に、セッションが終わったときに、いい夫・父親になりたいと思うようになっていきました。

ナラですが、彼の個人的なセッションには入れましたが、ファミリーセッションには入れませんでした。そしてナラが入ることで、共感を学ぶことを目的としました。

PTSD の患者は、不安や自己否定することがあり、どんどん自分の中に閉じこもり、外の世界に目を向けなくなります。自分は不安症状が高く、外界で起きていることは全く関係ないと感じるのです。

ナラが入ってきたときに、私はダンに言いました。「ナラが何を考えているか、考えてごらんなさい。何を感

じるのだろう」。そういう質問は、当初ダンにとっては変に思えたと思う。しかし徐々にナラを注視するようになって、「元気なんじゃない？」とか伝えることができるようになっていきました。私たちは何セッションも使って、どうやって犬に関わるかを学習しましたが、それを段々と家族セッションに適応していこうと考えました。

もう一つ重要なのは、ダンはいつも泣いていたので、セッションなどはせずに、「犬と遊ぶだけ」ということをやってみました。子どもへのプレイセラピーのようなものです。PTSD では悲しみのあまり泣いたり、不安症状が高かったりするのは、犬と遊ぶこと自体が重要なセッションとなります。彼にとっては、犬と遊ぶことはいいことでした。彼が泣いているとナラがやってきて、頭を膝の上に置き、顔をダンのほうを見上げるときもありました。この中では、2つのが大切です。

1) ダンが持つ、ナラは自分の犬だ、という感覚。あくまでもナラを優しくなでたり触ったりする。次第にナラに対してやっているのではなく、セラピストやそこにいる人を安らげたりしていることが分かってきました。

2) ときにダンがものすごく泣くことがありました。そこに犬が来てダンを見上げると、彼は犬を見て笑いました。犬とのアイコンタクト。それは気持ちのコンタクトです。

これはとても大切です。ヒトが悲しい時、周りは同じレベルの悲しみにいてあげることが大切です。でもときどき、患者は常にその悲しみの中にいます。そこでブレイクが欲しい。そこに犬がきて、犬を見て笑う。泣くということは、症状として大切であり、彼にとってはそれは解放感であります。犬といることで面白いことも自然と出てきます。ムードアップをする効果もあるのです。皆さんは犬のことをよく知ってますよね。おもしろいことをしますよね。いつもシリアスな関係ではないですよ。撫でられているとき、不安・悲しみ・いらいらするときでも、重い気分になっても、犬がおもしろいことをしたら、笑ってその気持ちから離れることができます。解放感に浸ることができます。シリアスな話をしているとき、犬がだらしない恰好をしたり、変な顔をしたり、立って背伸びをしたりする。ときに犬はおならをする。ナラはおならをよくしました。面白いでしょ？

同時に、彼がナラに接しているときは、私はナラに優しく話しかけるようにしていた。それは一つの役割モデルであると思います。彼は、私が自分の子どもと一緒にいるのを見たことはありません。しかし彼は、「私と犬の関係性」を見ているのです。彼はナラを、自分の子どもとして見たのです。彼がナラに対して優しくしているのは、子どもへの優しさのモデリングでもあるのです。

2年後には、彼の PTSD は消失しました。普通の不安レベルになりました。非常に安定しました。家族に対しても、以前よりずっといい父親になりました。

このセラピーは3年前に終わったのですが、私が日本に来

る1か月前、彼は私に電話をしてきた。「アローン、信じられないと思うんだけど、テロの日付の事だが、毎年その日になると思いだしていたのですが、今年はなんと、その日だったのに、それを気づかずに終わったんだよ！」それまでは毎年毎年、再体験をしていたのですが、彼にとって、それを思いださなかったのは凄いことです。

認知的には、その日付は忘れていたわけではありません。ですが、症状からは逃れられたことがわかります。

最後の3つ目のケースです。

ジャック。若い男性です。彼はバイク事故で、頭頂葉の脳損傷を起こしました。事故の前、彼はとても悪い人でした。彼には犯罪歴があり、16歳からピストルを所持していました。ともかく人に対して当り散らす悪い人でした。そしてヒトにプレッシャーを与えるような肥満体でもありました。

彼はその交通事故で傷を受け、リハビリセンター（脳損傷専門）に連れて行かれました。そこで2つのセラピストにかけられました。サイコセラピーの先生と、私の認知療法です。

認知問題は、覚えたり、考えたり、それを統合したりすることです。そのセラピーをしなくてはならないので、私は彼に記憶したりする課題を与えた。彼は私に怒っていました。「あんたがやれ!」。その紙を渡されても全く遂行できないので、くしゃくしゃにして投げつけてきました。私をつまみあげ、窓の外に投げ出そうとしたこともあります。彼は、自分が来たいときしか診療室に来なくなりました。そして来るときは、事前に知らせないで来る。私が他の患者とのセッション中でも、彼はずかずかと診療室に入ってきて、患者さんを部屋の外に放り出し、私の目の前に彼がでんと座る。彼のそういう行動は怖いものでした。

ただ、基本的に、彼は頭がよく、面白い人でもありました。そのときの彼の行動はコントロールされてはいませんでした。彼は事故の前から乱暴で、事故のあとは頭頂葉が損傷したことで、さらに自分の行動がコントロールできなくなっていたのです。

ちょうどそのころ、私はそのリハビリセンターを私はやめて、クリニックを開きました。彼は、私のクリニックにやってきました。こういう経緯はイスラエルではあまりないのですが、彼が私の所に来たがったのです。というか、他の心理系の人とは、とても彼とセッションができるような状態ではなかったのです。

ただ、これから自分のクリニックで犬とセッションが可能となりました。

いつも彼は怒っており、父母ともいつも喧嘩状態です。他の人に対してもいつも喧嘩を吹かけます。だから他の友も、全部離れて、彼は孤立していました。そういう中で、ナラは彼のところに来て、彼は犬が好きだったので、その犬をとててもかわいがりました。犬が少し離れると、彼は自分のところに犬を呼びたいと思いました。彼は犬に対して怒鳴りました。

「こっちにこいや!!」と大声で。もちろん、犬は来ません。なので、私は彼に教えました。こういうチャンスを利用して、どうやって他の人に話しかけたらいいか。それを実践していききました。

自分自身が犬に来てほしいという気持ちから、時間はかかりましたが、徐々に彼はナラに対して優しく指示を出せるようになりました。彼とのセッションの多くでは、彼が人のことをどういうふうを考えなければならないか、ということに時間が割かれました。彼はそうはいつでも、いろんな人たちが自分の所に来てほしい、と願っている人でもあったのです。が、彼の行動が悪いので、誰も来てくれなかったのです。

犬を使って他者への交渉を教えたあとに、両親をクリニックに呼びました。彼が両親に対して口調が柔らかくなったということ、私は分かっていました。そうすると、徐々にご両親も自分たちの気持ちを彼に話せるようになりました。彼には徹底して、以前に私に言ったように、ナラの気持ちを考えることを実践しました。徐々に社会的に心が開かれていったことがお分かりですね。

彼についてのもうひとつのエピソードですが、彼の家には水槽がありました。彼は父親と魚を買いに行きました。そして彼は2匹のシャークフィッシュという凶暴な魚を買ってきて飼いだしました。彼が私に言うには、2匹のシャークフィッシュは、違った性格でした。1匹は王様のように威張って水槽を泳ぎ回り、他の魚を蹴散らす。「誰も私のいうことに従え!」。もう1匹は同じ種類なのだが、彼が言うには「洗練された魚」で、静かにしていました。ジャックは「僕はああいうふうに（洗練された魚のように）になりたい」と言いました。「僕は昔、あの王様魚のように、とても傲慢だった。そういうことはもうしたくない」と。

またあるとき彼は、カメを連れてきて、クリニックの中に持ち込んできました。彼は「私は、カメのようになりたい」と言いました。彼が言うには、カメには甲羅があり、誰も攻撃できない。そしてベジタリアン。絶対に他の人を殺して食べることはない。そうになりたい、と言うのです。

そういうことを通じて、彼はさらにナラにいい行動を取るようになってきました。彼の行動は確実に変わってきました。同時に彼は彼は宗教的になってきました。ユダヤ教には、「過去の自分に対して許しを請う、悪いところを消してほしい」という部分があるのです。

最終的に彼は宗教的になり、父母にも優しくなり、彼は私に対してもそうなのですが、他者の気持ちを尊重できるようになりました。彼は仕事に戻って、新しい友達ができるようになりました。彼とは今も友達ですが、以前のような乱暴な友達ではありません。最近、彼は結婚し、私はその宗教的な結婚式に招待されました。厳格に男女が別のところに行う儀式を彼はきちんと行っていました。

これで終わります。

犬介在心理療法

2つのケーススタディ

アロン・ワッサーマン, PhD,
レビンスキー大学, イスラエル

【スライド1】

初めのセッション

- Joeは私に関わろうとしなかった：私の発言にもリアクションはなく、私の質問にも答えなかった。
- 突然彼は、Nala（犬）と、とても荒いやり方で遊びだした。
- 20分後、彼はドアを開け、母親に向かって「帰ろう」と言った。

【スライド5】

少年 (Joe)

- 年齢6歳。知的に高くハンサム。
- 治療開始の1年前に、彼の父親は交通事故で死亡。
- 3歳の双子の弟妹がいる
- 母親は熱心な人だが、彼の行動を抑えることはできず。
- セラピーの3か月前に、一家は新しい家へと転居したばかり。

【スライド2】

それからの数セッション

- 次第に彼は、Nalaについての私の話を耳にするようになった。
- 短い会話。
- 外に出る：Nalaを「トレーニング」するために。

【スライド6】

現状の問題点

- 感情部分：悲しみと怒り。それらの行動をコントロールするのが困難。
- 社会部分：他の子ども(男児)に対する怒りと暴力を放出する。
- 家族部分：母親と、双子の弟妹への敵意。
- 認知部分：感情的ストレスにより、集中に難あり。

【スライド3】

本格的治療

- クリニックの外での長めの会話。
- 遊び場で他の子どもたちと出会う：自然なインタラクション。
- 三角形のコミュニケーション
Joe — 私 — Nala
- Nalaから私へ、注目が移りだした。

【スライド7】

紹介の経緯

- 母親はJoeに、他の心理士の所で3セッションの治療を受けさせた。
- 彼は行きたがらなかった。
- 母親が私の所に来たとき、彼は「犬がいるなら」と来ることに同意した。

【スライド4】

Nalaの不在時

- その可能性は前もって伝えておいた。
- 怒りの反応
- Nalaなしで私と遊ぶ
- 喪失と不在への対処のチャンス
- 関係の構築

【スライド8】

セラピーの結果

- 1年間の犬介在心理療法の結果、-
- 感情性：彼の気分は安定した。コントロールの必要性が減った。
- 社会性：激怒や暴力を起こさなくなった。
- 家族性：関係性の正常化。
- 認知性：素晴らしい生徒。

【スライド9】

紹介の経緯

- 心理士は毎週3(1)セッション受信することを提案した(1回は家族セッション)
- どんな薬も飲もうとしなかった。
- 彼は私に対し、リハビリ的心理療法を求めた。
- 彼は犬に驚いた。

【スライド13】

初めのセッション

- Danは、とても抑うつ的で、とても苛立っていて、疑り深く、「ビクビク」していた。
- 泣き続ける。
- Nalaは不在だった。

【スライド14】

男性(Dan)

- 50歳。知的に高く、魅力的なビジネスマン。
- 既婚。3人の子どもがいる(16, 20, 22)。
- テルアピブのレストランで起こった自爆銃撃テロの中で、彼は重要な役割を果たした：彼はそのテロリストを殺したのだ。
- そのことが起こったのは、セラピーが始まる6か月前だった。
- 彼は重篤なPTSDに悩まされていた。

【スライド11】

それからの数セッション

- 「2つのDan」：セッションの前後。
- Nalaに次第に接触。

【スライド15】

現状の問題点

- 感情的：不安と抑うつが重複していた。
- 職業的：職場や他の活動において、全体的に動けなくなっていた。
- 家族的：すべての家族と、終わりのないいざこざ。

【スライド12】

本格的治療

- 怒りが穏やかになってきた
- 不安が減少した
- 新生活の計画を立てだした
- 三角形のコミュニケーション
Dan — 私 — Nala
- 家族セッションのときは、Nalaは登場しなかった。

【スライド16】

Nalaの役割

- Nalaと遊ぶ：「成人のプレイセラピー」
- 号泣へのNalaの反応
- 気分の上昇：より笑うようになり、室内ではユーモアも出現。
- 役割モデルとしての犬の幸福感を、私は懸念した。
- 情緒的気づきへの、生きた仲介役。
- 教科性と他者への気づきを促進した。

【スライド9】

セラピーの結果

2年間にわたる犬介在心理療法の結果：「事件が起こる前のDan」に「改善」した。

- 情緒的：正常な気分と不安レベル
- 家族的：家族全員との関係が改善
- 社会的：正常に戻った
- 職場的：普段通りに働けている

【スライド10】



PTSDとアニマルセラピー パネルディスカッション

司会：横山章光氏（帝京科学大学／精神科医）

パネリスト：アローン・ワッサーマン氏（通訳：津田望氏）
山口修喜氏、海野千畝子氏

○司会

それでは、皆さん少しリフレッシュされましたでしょうか。

しつらえも変わりまして、これからは座長のほうを横山先生にお願いしまして、パネルのほうに入らせていただきたいと思います。早速、横山先生よろしくお願ひいたします。

○横山

でははじめます。今日の私の正直な感想なんですけど、とにかく唖然として、驚いています。あまりの凄さにびっくりしています。興奮しています。何に私が興奮しているかを少しご説明しなくてはならないと思いますが、まず、アニマルセラピーが何に効くか、ということは、大きく分けて「精神面」「身体面」の双方があると思います。例えば「身体面」のリハビリに乗馬療法を用いるとか。まあそれも「こころ」にも関係してくるのですが、まあざっくりと「心」と「身体」に分けましょう。

その中で今度は、「こころ」のほうを考えてみますが、その対象者として我々が追っているのは、例えば年齢層からいうと子どもさんから高齢者、疾患名でいうと発達障害から認知症などです。ここらが一番深く切り込まれているところです。こういうところはなかなか「治療」法が確定せず、現場で困っているところです。

そして、「こころ」の治療には、これもざっくり分けますが2種類あって、「精神療法」と「行動療法」です。「行動療法」とは、「外に答えがあって、セラピストが患者さんをそこに導いていく」方法で、「精神療法」とは、「患者さん自身が答えを持っていて、セラピストと一緒にその答えを探していく」方法と理解したらわかりやすいです。例えば、犬のしつけは「行動療法」に近いですし、俗にいうカウンセリングは「精神療法」の範疇に入ります。

そういう意味では、世界的にもアニマルセラピーが取り組んできたのは、「行動療法」へのアプローチがほとんどでした。つまりある種「ご褒美」としての動物です。

今回の先生方がお話ししてくれた、PTSDへのアプローチはもうそうではなく、いよいよ「精神療法」の域に入ってきたな、ということです。「精神療法」の補助として、動物を使いだしたな、ということに、私はとにかく驚きました。これは案外に斬新な点なんです。

もう一つはですね、精神科にもいろいろな疾患があるのですが、今回のPTSDや被虐待児などを考えると、今まであまりアニマルセラピーが、きちんとアプローチしてこなかった細かい疾患を、その疾患に合わせて用いだしているな、ということに驚いています。こういう細かさは、今後「摂食障害」とか「不安障害」とか、様々な個々の疾患へのアプローチに分化していく可能性を大いに秘めているな、という希望が持てました。

今回は、PTSDに関してもう少しお話ししておきます。

PTSDとは、アローン先生もお話ししたとおり、大きな「命が危くなるような」ストレスがあって生じる疾患です。これは診断基準がはっきりしているので、ストレスがあれば必ず起きる、というわけでもありませんし、小さなストレスを長々と受けてきた場合、被虐待児のとき、そして急性のストレス障害であるASDともまた個々異なってきますが、これらはとにかく「外部からのストレス」によるトラウマを考慮に入れた症状群と考えると分かりやすいでしょう。

最近PTSDで言われているのは、画像診断で新しい知見が出てきていますが、脳自体が変化してしまう、脳の一部が萎縮してしまう、というのはもうまあ確定だろう、ということです。そしてPTSDの3症状は、「過覚醒」「回避」「フラッシュバック」で、それ以外にも抑うつや不安などを引き起こす、ということですね。

一昨日、慶應大学精神神経科主催でアローン先生のシンポジウムをしたのですが、そこで飛鳥井望先生という、日本のPTSDのトップの専門家が、現在のPTSDの考え方を報告してくださいました。PTSDというのはこの10年ぐらいでアプローチ法が変わっているぐらい未だ新しい概念なのですが、現在きちんと治療としてエビデンスがあるのは、曝露療法をシステムティックにしたPE療法というもの「だけ」でした。薬物療法もEMDRも、まだエビデンスははっきりしていない。私はEMDRの経験はないのですが、山口先生はおありですか？ 効きますか？

○山口

ええ。

○横山

やっぱりすごいですよね。

○山口

曝露療法と結構対極で競争してるところがあるので、日本においても。

○横山

よく効くことは効くんですけどね。

○山口

EMDRと合う患者さんだったら。

○横山

効くんですよ。

○山口

効く。全員だとは思わない。

○横山

それで、PTSDに対しては、この曝露療法の中でも、それをシステムティックにしたPE療法というのだけがエビデンスがある、ということですが、それはどういうものなのか、というと、先ほど海野先生のやられてるのと一緒のような感じですよ。つまり、治療初期のプログラムの説明と心理教育、この2つがめっちゃ大事なんです、と飛鳥井先生は言っておられた。ここをしっかりとっておかないと、こういう曝露療法というのは物凄く脱落率が高くなっていくので、とにかく治療の初期の「説明・教育」がカギを握っている、ということです。海野先生がやられているのは子ども版で、アロン先生は成人・子ども版、両方のように感じましたが、まさしくやられているのはPE療法の流れに見合ったものだと、私は感じました。

それで、何が重要かということ、やはり先ほど海野先生が言われたように、子どもたちが初期に脱落しやすいのを、動物を使うことで、次のステージに持っていきやすいんですよ。動物がいると、それができる。そこが非常に理にかなった動物の利用方法だと思うのです。しかもあれだけ綺麗に計画をして、美しい結果を出されていることに、私は「うわあ、すごいなあ!!」と舌を巻きましたね。さらに、きちんと動物への倫理的な配慮もしていて、しかもこの、初めに「この犬は抱っこされたらどんな気持ちにするんだろう?」とか気持ちをやさしく、人間ができないことを犬にやってもらっている。そういうようなことは、もし人間だったら絶対できない。それを、生きている犬ができるという。これは他のやり方ではできない。これが2つ目に驚いたことです。

もう1つ考えさせられていることなんですけど、それはこのアロン先生とのツアーで何度も彼と話していることなんですけど、「犬の立ち位置」についてです。日本だったら、精神療法をする際に、治療者がいて、そして患者さんがいる。その2者関係の中で、治療が始まるわけですよ。そしてここにドッグセラピーをもってくる、としたら、日本だったら「ドッグを連れてきたハンドラー」が来る、ということになるでしょう。ところがね、山口先生もアロン先生も、「治療者自身のドッグ」なんですよ。「ハンドラー＝セラピスト」ですよ。ということは、患者さんは、「治療者とその飼い犬」

の「関係性」を見ているし、治療者もその「関係性」を利用しています。これが非常に面白い。目立たないかもしれないが、ここが非常に重要な点なのです。

海野先生のやられてる場合も、「セラピストの犬」ですかね?

○海野

セラピストの犬です。

○横山

と感じてますかね、子供さんは。セラピストの犬。

○海野

子供はセラピストの犬と感じてました。

○横山

セラピストの犬と感じてました。

○海野

はい。

○横山

施設で飼われている犬ですもんね。

○海野

施設の飼われている犬は、施設にいる犬で、また別の犬。

○横山

ああ、じゃあ、このトムトムというのは、この職員。

○海野

私の犬です。

○横山

ああ、そうなんですか。それなら、3人とも「治療者の犬」を使っているということだ。

○海野

はい。

○横山

やはり、ここが面白い。例えば、治療者と患者が、二人で動物園に行った場合、もしくは「他のハンドラーが自分の犬を連れてきて」治療に参加した場合、とは全く異なる「治療者とその飼い犬」という関係性を、御3方は利用している、ということです。

つまり、患者さんは、治療者と犬の「関係性」を見ながら、「ああ、あの犬のように私も育てられたかったとか」とか、こう



いう感覚が出得るわけです。この関係性を3人とも凄く重視しているのが、非常に面白い。

正直、私は今まで、「セラピストの犬を使う」というのは、ちょっと難しいんじゃないか、日本では特に「犬を管理して治療もしなきゃいけない」というのは、かなり限られてるという意味で、難しいのかな？ と思ってたんですけど、こと、このPTSDという問題になってくると、この関係性が生きてくるわけだから、治療者が飼っている、ということが物凄く治療に優位に働いてくるわけです。この「治療者とその飼い犬の関係性」があるからこそ、患者さんはその後、「ほかの関係性」にそれを見立てていくことができるというわけで、「ハンドラーが連れてきた犬」と、「治療者の犬」とは、異なるんですよ。構図としては非常に似てるんですけど、大違いなんですよ。似て非であるということを我々はしっかり頭に入れておかないと、ここは勘違いしてしまいそうになるところです。PTSDという疾患に関しては、「外からぼつと犬を連れてきても、その関係性を応用した効果的な治療はできないよ」という感じが少ししました。

○海野

先生、あの。

○横山

はい、どうぞ。

○海野

ただ、私たちが行っているドリームキャッチャーのセラピストであるエリンさんという方がおっしゃられるには、自分の犬だったらできなくても、ほかの人の犬だと起きることがあるというの。

○横山 それは何が、どういうこと。

○海野 だから、こちらの問題で起きてくるこの人の表現もあるんだということで、何でしょうね。

○横山 わざわざ第3の犬を連れてくる……。

○海野 第3の犬を連れていく必要、あったりもするという。

○横山 なるほど。

○海野 はい。両方、多分やれることがあるんだろうなという……。

○横山 なるほど。それは、おもしろいなあ……。いずれにせよ、構図がすごく似ていますが、違ったことをしているのかもしれない、ということをお我々は意識しておかなければなりません。

何か、ここまでのところでありますかね。

すいません。興奮して話し続けてしまって……。ではいよいよ個々の先生に、他の先生たちのお話を聞いてどう感じたかをそれぞれお聞きしてみたいと思います。山口先生からお願いします。

○山口

そうですね。きょうは、特にアローン先生の話をお聞かせさせていただいて、すごいやっぱり長年やってはる方の経験だな。自分はまだまだ年数的には浅いなという感じがあったんですけども、でも、その中でも、とても共通点といいますか、ちょっとユーモア的な犬がおかしなことをするみたいな、おならするとかいう話もあったんですけど、うちのポンもたまにして、クライアントさん、くっさあとか言って、笑ってたりとかですね。それだけではないんですけども、覚醒したものを下げるとか、やっぱり悲しみに寄り添うとか、怒りというものに対しての犬の介入の仕方とか、そういうこと、いろんなことが、共通点は見つけられたなというところが、特に私にとっての大きな点でした。とりあえずは以上で。

○アローン

イスラエルではいろんなほかの、これ以外のほかのセッティングもあります。例えば、違う動物とのセッションだったり、犬と一緒にすけれども、でも、自分が犬を使わなかったりということもあります。シェルターの中でAATをやっているものだったり、いろいろな犬には性格がありますよね。それにあと、いろんな大きさの犬もいるわけです。例えば、シェルターでやってるAATなんかでは、いろいろな患者さんに合わせていろいろな犬を選ぶことができます。いろんなときに、そのときどきに合わせてその患者さんの症状に合わせて、一人の患者さんのためにいろいろなほかの犬を持ってくこともできます。何か私たちが1つのターゲットを持ってきたときに、治療ターゲットですね、同じ犬で、全部のセッション、同じ犬にして、ほかの犬を連れてきたり、もしそのいろいろなその。

ちょっと今のお話だとわかりにくいので、例をもってお話ししたいと思うんですけども、エチオピアから来た患者さんがいました。彼は黒人で、そうすると、彼は、ほかの人たちは彼のその皮膚の色について笑ったりすることもありました。黒い犬を使おうと思ったんですけど、でも、それだけではなくてほかの犬も連れてきて、一緒にそのセッションに入れるということをしました。その患者さんは、黒い犬も見ますけれども、ほかのいろんな犬を見るわけです。でも、彼はいつもその黒い犬と一緒にいました。そこで、その彼がやろうとしたことというのは、社会的に違うということ、そういうことについて話し合うという機会を持つことにしました。



シェルターの中の犬というのは、学校の子供たちのように、いろんな人やいろんな犬がいるように、いろんな人がいるわけですね。

ほかのケースをお知らせすると、足の悪い犬を使ったりもします、その身体障害のお子さんと一緒にですね。通常は、私は2匹の私の犬と私の猫と一緒にセッションをやりませけれども、そのセッションによって、また患者さんによっては3匹一緒にやることもあるし、1匹だけのときもあるし、犬と猫というときも、いろいろな組み合わせで、私はその患者さんに合わせてやっています。兄弟の問題を持っている子供がいたときに、その場合には2匹の犬が必要になってきます。例えば、もしくは3匹必要かもしれません。例えば、その患者さんが社会的な問題を持っている、そのエチオピアの患者さんみたいに。そういう場合には、もっとたくさんいろんな種類の犬がいたほうがいいと思います。どの犬もいろいろな違う性格を持っているからです。もしその同じ犬が一人の患者さんだけについていくならば、もし、その患者さんがいろいろな犬を見られて、そして、いろいろな反応が犬から見られた場合にどれに興味を持つかということをお私たちが選ぶことができるからです。

よろしいでしょうか。

○海野

私もアローン先生の講義を初めて聞いて、カナダでエリンさんという、今私のスーパーバイザーですけれども、お会いしたときと同じような、非常にわくわくした気持ちを持ちました。今のお話のように、どの患者さんにどの動物を与えるかとか、それはセラピストの見立てでもあったり、時には、患者さんが選んでくれたりだとかということも同じでした。

私たちの領域ですと虐待なので、子供がどの動物とやりたいかの中に、その動物のストーリーを話していました。この動物は実は虐待を受けた動物なんだと。この犬はそうではない犬で、どちらの動物とあなたはセラピーをしたいかというようなことを聞くと、虐待を受けた子供は、虐待をされた動物とやりたいというふうなところで、自分と同じ同士を選んだというようなエピソードを聞いたことがあります。

私も今後、ある程度そのトムトムでやってきたわけですけれども、今後、いろんな犬だったり、ほかの動物だとかに発展していきたいと思っていたので、アローンさんのきょうのお話というのは非常に感銘を受けましたし、今後の足がかりができたかなというような印象です。

○横山

どうもありがとうございました。

さて。今日の課題はもう一つあるわけで、それは「イスラエル」ということです。このことは、今まで欧米からの情報しかなかった我々にとって、いったいどういうことになるのか。今日通訳してくださっている津田先生と私たちは、去年イスラエルに行ってきました。

イスラエルという国は、我々はやはり、ちょっと何ていう

か、離れている感じで、ちょっと怖い国だというイメージはありませんかね。ところが、私はIAHAIOとかそういうところに参加して、毎回イスラエルの発表がおもしろくてしよがなかった。特に前回？ 前々回？ ぐらいのIAHAIOで聞いていると、イスラエルからはAATやAAEのケーススタディが何個も発表される。こういう国際会議では、データが重んじられ、ケーススタディは軽んじられる。その中で堂々と、ケーススタディをイスラエルは報告してくる。しかし私は、データなんかより、ケーススタディのほうがはるかに面白い。毎回イスラエルのケーススタディは面白くてしよがなかった。

その中で、私がほほう、と思った面白い報告は、小学校でのAAEについてでした。

子どもたちが学校で飼っているハムスター、いやモルモットかな、に、子どもが生まれた、と。そしたら子どもが先生に聞いた、と。どうして結婚してないのに赤ちゃんができたんだ、と。子どもたちは不満顔。結婚してないじゃないか！

それで先生は、そのエピソードを利用して、モルモットの結婚式をみんなで挙げたり、性のことを説明したりいろんなことをして、AAEとして活用していった、という・・・。そういう発表をイスラエルの人たちは、楽しそうにするんです。

そういう人たちの発表が終わったあと、私は「おもしろかったですねえ」と何度も話しかけた。そして私は、「イスラエルでアニマルセラピーどうなんですか」と問うてみると、彼女たちは「ああ、うちの国ではアニマルセラピストみたいな人がいるんだよ」と言う。「それで食ってる人いるよ」みたいな話。私は驚いて聞いた。「ええ?? エビデンスがないのに、それで食べている人がいるの?」「うん、別にできるけど」って言う。このエビデンスがないのにというのが1つのポイントで、我々は文化背景さえバックにあれば、割にエビデンスがなくてもやるんですよ。例えば、学校で音楽を教えたり、体育したりというのは、将来体が元気になるとか、音楽的にどうかとかというのはないけど、日本で生まれた文化というのは、何となく日本ではエビデンスなしに使う。ところがアニマルセラピーというのは、日本は余りアニマルという文化がないから、エビデンスが必要になってくる感じがある。しかしほかの例えば、園芸療法みたいなものは、そこまでエビデンスなくても、日本では多分やらせてくれるでしょう。これは農耕民族出身の我々のバックグラウンドがあると思います。

そして3・11の直後にアローンからメールが来たんですよ。すぐに。「もしアニマルを使った心のケアをやるんら何か手伝うよ」と。親切に連絡いただいたのですが、被災地とはうまくつなげなかったんですね、そのときは。さすがにもう3・11の直後は心の問題どころではなかった。ところが、今回仙台も行って来たんですが、今からは心のケアが非常に問題になってくる可能性がある。データ的に見ると、今

のところ専門家チームから報告されてるのは、仙台というか、東日本大震災って、割に心、それによる直接のPTSDは、それほど報告されてない、ということにはなっていますが、それは今からまだわからない、と思う。

それで、何が言いたいかというと、一番不思議なのは何かというと、今回イスラエルに行った私の目的は何かというと、イスラエルという国は（今の国の状態で）できてから60年ぐらいいかならない国であること。しかも世界から寄り集まってきている。ということは、文化的なバックがない。あったとしても、世界中の各地域の動物観が背景にあってもおかしくない。動物に対する共通認識がない国のはずなんです。それなのにそこで、何で動物を使ったセラピーが必要だと思ってるのか、というところが、現地に向かう前から一番私としては不思議で……。私の頭の中にあっただ方程式とは合わない……。「アニマルセラピーで喰っている人がいるなんて、嘘だろう」と思って行ったんですが……この国でばしばし撮ってきた写真はあとでアローンに説明してもらいましょう。私も日本の事を知ってもらいたくて向こうで、英語もできないのに彼らに対して「日本の動物とのつきあい」について講演させてもらったんですが、彼らと何日間にもわたっている話していると、日本とイスラエル共通点って結構あるんですよ。共通点というのは、どちらも何かぼつんとしてる。例えば、イスラエルだったら周りがアラブに囲まれてて、イスラエルがぼつんとある。日本も中国とかアメリカに囲まれている。どちらも「島国」なんです。だから、アジアの西と東の島国のような感じなんです。しかもどちらも割に勤勉で頭がいい。だから、そういう意味ですごく似てるなって感じた。不思議なのは、一神教の歴史として、ユダヤ教からキリスト教が派生して、またイスラム教が派生して、つまり一神教はユダヤ教がスタートなんですけど、ユダヤ教だけが、世界に広がろうとしてない。でも、派生して起こったキリスト教、イスラム教は布教活動がすごい。世界を席卷してる……。イスラエルは、ユダヤ教は、そんなに広がろうとしてない。「自分のとこだけ」という感じ。だから、「何となくぼんやりとした国をつくってきた」我々日本人と、「今から国をつくらなきゃいけない」イスラエルとの違いはあるんですが、何となく島国という感じが非常にするという。

ここから、写真を映しますので、アローンの説明を聞きながら見てみましょう。

○津田

これを説明してほしいんでしょう。

○横山

うん。だから、ここを。

○アローン

これ、老人ホームですね。その中で、いろいろな動物を飼っています。村時さん。彼も老人ホームで働いてる方ですね。この中にはいろいろな動物が飼われてますが、犬、猫。……ですね。鳥もいっぱいいます。カタツムリもいますよね。い

ろんな動物がそこに飼われています。そこはもう住んでいるところですから、彼らのペットを連れて入ってらっしゃいというふうに皆さんに言います。

イスラエルにほかのプロジェクトがあるんですけども、サービスドッグですね、いろいろな介護犬とか、セラピードッグではないですけども、サービスドッグですね。老人ホームにそのサービス犬がいます、介助犬とかですね。その犬はうろちょろして、いろいろな部屋をうろちょろします。もし利用者の方が何か起きたときに、そして、その子はそれを見た場合にその廊下に出て行って、そして、ボタンを押すというふうにちゃんと訓練されている犬がいる。看護師がちゃんと来られるようになってるように訓練されている犬もたくさんいます。

それから、ほかの成人というか老人のプロジェクトでは、アルツハイマーの患者さんなんかですが、独居してるようなアルツハイマーの方です。その独居老人でアルツハイマーの人にいつも一緒にいさせるような犬で、アルツハイマーのトラブルというのは、どこか行っちゃうことですね。徘徊行動があるということです。このサービス犬というのは、一緒にその老人と歩くということに訓練されています。だから、その人がわからなくなっちゃったときに、その人を家に連れて帰ってくるというふうに訓練されている犬もいます。もし、道に迷ってしまったら、どこに行ったらいいかというのをちゃんと犬はわかっています。どこかに行こうとするとその前に立って、そっちに行かないように、そういうふうに行動できるように訓練されている犬もいます。アルツハイマー……。

ここは薬の依存症の人たちが入る病院です。動物を使ったグループセラピーも行われています。動物を入れたグループディスカッションをします。彼らの生活そのものが薬の依存症になっていく、ドラッグの依存症になっていくということがあるわけですから、動物の面倒を見るということが、他者を面倒見るということが自分のことに帰ってくるというんですか、それが自分のベターライフにつながっていくというふうに考えられているからです。ここをよく見てごらんください。よく見ていただきたいんですけど、余りお金がないですね。でも、ここにいる動物のパワー、ヒーリングパワーはこの場所に、何となくお金がないとこですけども、貧相ですけども、非常にたくさんヒーリングパワーがあるということがわかる。そこには、いろんなケージもなければいろんなひもでつながれているわけではなくて、いつも私たちは動物たちと一緒にいるということを奨励されています。

ここはほかのところ。精神病院ですね。小さな動物園みたいなところ。動物は自由にしています。

○津田

先生、早いですよ。もう少しゆっくりで……てん。

○横山

いやいや、いい写真を、こっちにしようと思って。

○津田

探して。

○横山

どれがいいかな。

○アローン

そこでとまって……。

アニマルコーナーに子供たちが来て、そこでA A Tセッションを受け、そこにいるセラピストというのは、アニマルセラピストではなくてカウンセラーの場合もあります。動物のセッションの子供たちは、餌を与えたり、中を掃除したり、動物に話しかけながらそういう活動を行っているということをよく見かけます。彼らはとても行動的には大変な子供たちです。セラピーではありませんけど、A A TではなくてA A Eですけども、これで見られるように、いろんな動物たちを飼うようなコーナーをどんどんつくっていくというふうに、今イスラムの学校ではそういうことを行われています。科学ですとか、そういう先生たちが動物を連れて授業をやる、そこで動物たちに対してとても責任を持つということを学んでいったりします。

ここは小児がん病棟ですね。とてもきれいなところで、免疫の低い子供たちがいるので。幾つかの動物は、がんがあっても一緒にさわっても大丈夫なような動物たちもいます。余りさわってはいけないような動物に対しては、このようにタンクやなんかで中に来てさわれないようになってるんです。モルモットや蛇というのは大丈夫。全然大丈夫。犬も大丈夫。犬はいつでもどの病院でも入れるし、私たちはそういった何の問題もありません。

ここは成人の知的障害の人たちが集団で暮らしているところなんです。ここではいろいろなアニマルを使った動物療法を行っています。ここでは乗馬セラピーもやっています。

ここは、とても重症な障害を持っている子供たちが入っているところなんです。とても大きいところで、サファリパークがあります。中に車椅子でも入れるような状況になっています。

○横山

暑かった。これね。

○アローン

大体40度ぐらいありましたからね。

○横山

あんな暑い中だから、やっぱりこれ使いたくなるわ。歩けない……。

○アローン

それで、影を見てください。影が全くありません。真上に太陽が来てるんです。

○横山

ペリとチリとはえらい効い。

○……

へえ。チンチラ。

○横山

これ、頭が、こうかぶってるのは。……が。

○アローン

いや、横山先生のあれおなかです。

○横山

これがアローンの手やね。

○アローン

これは私と私の患者です。私の子供も。アソという子供です。私の膝に乗ってる。4人子供がいます。

○横山

そんなもんかな。

○アローン

ここは彼のクリニックですね。プライベートクリニックです。

○横山

すいません。はじめにたくさん私が時間を使ってしまったために……。ただ、精神科的なこと、つまりPTSDのことと、動物の立ち位置、そしてイスラエルのことというのは、とりえず説明をしておかなければならないという思いが強くて……。

では、フロアから何か御質問やコメントなどがございましたらお願いします。

○ハ

それでは、失礼します。質問させてください。

○横山

御所属とお名前を一応。

○ハ

岡山県で高校の教員をしてますハと言います。よろしくお願ひします。

先ほど、横山先生や各先生方からコメントもありましたが、今回の発表でセラピーに使っている犬というのは、特殊な訓練をしていない犬というのがとても斬新だというコメントがありました。私の中では、セラピー犬というのは、やはり患者さんとか、その対象となる人物がいるわけですから、なかなかデリケートな存在であると思います。それを覆したという点では、私も驚きました。

ここで質問ですが、使われている犬の、例えば、共通した性格であるとか特徴であるとか、こんなのを教えてください。例えば、おとなしいとか、小型であるとか、我慢強いとか、何かいろんな性格があると思いますが、こういうところを教えてください。よろしくお願ひします。

○……

どうぞ。

○山口

通訳してはるかなと思ひながら、先に。そうですね、私としては、私の個人的な感想は、小さい犬がしやすいのかなということで、だからといって、やっぱり大きいわんちゃんには大きいわんちゃんの特徴があると思ひますし、トム、ノン、ポムっていますけども、3匹全然違うんですね。やっぱり

トムは賢くて感情を読むのがすごい得意。ノンちゃんは、舌を出して、うえて寝てる感じがとても癒やしの力がある。ポムは、人の餌をとったり、ちょこまかちょこまか、何かハプニングを起こしてくれる感じ。だから、要するに、ふうっと何か鬱っぽいクライアントさんには、ちょっと元気にさせてくれるようなのがポムであったり、感情をプロセスするのがトムであったり、何か味があるほうが、味というか、特徴があるのがやっぱりいいのかなという気はします。やっぱり、最低限はね、人をかんじゃだめとか、最低限の適正の検査は一応受けてるということで、その辺はクリアにしたいかな。やっぱりクライアントさんがとっかんじゃったりとかしてしまうとあれなので。はい、じゃあ、その辺で。

○海野

もうばれてると思うんですけども、夫婦でして、それで同じ犬を使っております。トムトム。

○横山

ええ、そうなんですか。

○海野

はい。同じ写真がありしたよね。それで、トムトムですけども、トムトムの適正は聞いたときに、抑鬱の患者さんに合うだろうというふうに評価を受けてたんです。それで、確かに今山口が言ったように共感的な素質を持っている、それでいて毛が抜けない。比較的室内にも、室外、まあ室内のほうに向いてるんだと思うんですけども、アレルギーの子にも大丈夫というようなことで、シーズー犬を私は今回は活用させていただきました。トムトムの体がちょうど赤ん坊の体重と同じなんです、1歳のときの。8キロぐらいで。それで、子供が抱くに当たって、小さ過ぎも大き過ぎもしいかなというあたりも適切だったのかなと思っていました。以上です。

○アローン

一番大切なことというのは、犬が本当におとなしくて静かなことです。セッションというか、セラピーが必ずしもどの犬も非常にしつけ正しいだけの犬を使う必要はないと私は思っています。

例えば、ナラはとてもよくしつけられていますけれども、本当にベーシックなことですけども、一緒に歩いたりお座りができたり、それから待てができたりって、それくらいのことしかできません。例えば、患者さんと一緒に座ってほしいと思えば、私が、はい、そこに座りなさいと言えば座るし、例えば、私と一緒にいたいときに呼ばれます。例えば、彼女が外に行きたいときに、私が外に行きなさいと言えばすぐに出ていきます。

ティカのほうは、全然トレーニングをやっていません。ワイルドアニマルみたいに、野生動物のようなですね。とてもおとなしくて、それからいい子なんですけど、例を差し上げますけれども、違う場面でティカのほうは使います。ある患者さんはお母さんから離れることをとても不安がるような、不安症状の患者さんが来しました。分離不安ですね。分離不安の

子供。例としては、例えば、その分離不安の子供に対して、分離不安の子供が来たとします。これがティカちゃんです。

○アローン

ティカさん。

○津田

ティカちゃん。さんじゃない。ティカちゃん。

○横山

ここで教えるでも。

○津田

そうですね、済みません。ちょっと日本語の今指導しちゃいました。

ぼけと突っ込みをやってる場合じゃないですよ。済みません。

○アローン

道路で見つけたコノ何ていうんですか、リノのことですね。とても小さい、小さい……。体中に虫がついてました。ティカちゃんは大きくなってからは、家の中にいるのが嫌いで、外にばかり行きたがってました。いつもフェンスをどんどん高くしないとどこかへ出て行っちゃうという子でした。2メートルも高い塀が建ってます。分離不安の子供を外と一緒に連れて行って、お母さんと離れるのとても悲しいでしょうって言います。ティカちゃんは僕から離れるのとても寂しいんだよ。そのティカちゃんに会いたいですかというふうに言います。その子供と一緒に道路に出ます。ティカちゃんは、僕は呼ばないけど、あなたが呼ばば来るわよというふうに言います。この犬は2メートルのフェンスを飛び越えられるので、ともかく走ってきて塀の上に飛び乗って、そしてそこからまた向こうへおりるといような……。その子供と一緒に道路に立っていると、ティカって、全然呼ばない。犬も分離不安になるので、彼らが道路にいれば必ず道路に飛び越えてくるというのはわかってるので、子供と一緒に道路でそのティカちゃんを待ちます。だから、それでわかるように、ティカちゃんというのは、本当に野生動物ですよ。

○横山

ティカ。

○アローン

そういう犬でも使って、そういうことに使っているという感じですかね。

○横山

じゃあ、ある種、解釈ですね。もう、ねえ。治療につなげていけばいいんですよ。解釈して。

○津田

全てね。

○横山

ほかに何か、どなたか御質問ございますか。はい、どうぞ。

○大脇

私、きょう名古屋から来ました。日本アニマルセラピー協会名古屋本部の大脇と申します。私は企業内セラピーと、今

度名古屋市さんと一緒に自殺撲滅キャンペーンというのをやるんですね。そのために、きょうはPTSDに関して非常に興味がありましたので、その自殺撲滅キャンペーンの何か参考ににならないかなと思って、きょう兵庫まで講演を聞きに来たんですけども、この自殺撲滅キャンペーンというのは非常に重いと受けとめておりますんで、何かアドバイスがありましたら教えていただきたいなと思います。

○アローン

イスラエルでまたプロジェクトの新しいのが始まったんですが、向こうのイスラエルの刑務所の中のプロジェクトの彼はアドバイザーをやっているんですね。その刑務所の中で自殺をする人が結構いるということがあります。その刑務所の執行人じゃない、囚人は犬を与えられて、もちろんその囚人で自殺をするリスクの高い人に対してですけども、もしその独房の中で、犬と一緒に過ごすことが長くて、そして心を通わせるようになると、動物の面倒を見るということで、そうすると、その世話をして自分の気持ちが安らぐということによって、その自殺をするという気持ちがだんだんなくなっていくということが報告されています。例えば、私たちが子供を面倒見ると同じような愛情を感じるわけですよ。それについての統計的な事実、エビデンスはありませんけれども、これは始まったばかりのプロジェクトなので。

○司会

よろしいでしょうか。ほかの方々にもお聞きしますか。大脇さん。

○大脇

はい。

○司会

名古屋の大脇さん。

○大脇

はい。

○司会

ほかの方もお聞きしますか。

○大脇

ああ、ぜひお願いします。

○司会

はい。もしあればお願いいたします。

○海野

先ほどトムトムが抑鬱にいいというふうに言いましたけれども、その抑鬱というのは、自殺に至るまでに多分かなりの確率で起きてるんじゃないかと思うんです。それで、死にたいというような気持ちになるときに、やはり今アローンさんがおっしゃったような犬の存在があればいいんだろうということと、それから、散歩をするということが大きいかなと思うんです。散歩をするんですね、右足、左足で歩くわけですね、犬と一緒に。多分、自殺したくなる時期というのは、夜だったり夕方だったりが一番大きいと思うので、その時期に散歩をすることになるわけですよ。犬がいて、死ぬという

ようなリスクが高い時期に散歩をしなければいけないことによって、自殺を食い止めることもできるのではないかなと思うわけです。

それと散歩は、右足、左足と、両側性の刺激を交互に与えるということで、トラウマ処理にもなるわけですね。自分の犬なのか、どこかの犬かなのかはわかりませんが、一緒に同士でつながっている、そのリードでつながっているということと、何かとても意味があるような感じがしまして、一緒に自分が友人と歩きたいなものに近いのではないかなと思いますので、もしかしたら、自殺を食い止められることができるかなと思いました。ただ、よく言われることは、余りに鬱の人といると、犬がそれを吸い取ってしまって犬も鬱になるということをするので、やはり時間的には、多分もう御存じだと思いますけれども、一日の稼働率だとか、クライアントさんと一緒にいる時間だとかというのは、犬の福利から考えてあげたほうがいいかなと思いました。

○横山

私のほうからも一言言わせていただきますと、基本的に鬱病の治療は、休息と投薬です。ですから、鬱病からの自殺が一番多いと思うんですけど、必要である休息の際に動物がいると、動物を散歩させるのは面倒臭くなります。しかも、波がある病気なので、例えば、ある時期に躁も入ると、引っ張り回したりとか、今度は鬱になったときに全然相手にできなかつたりとか、アップダウンも激しくなる。後からまた鬱になって、自分が面倒を見られなかったことに対する罪悪感が出るかもしれない。だから、基本的には鬱病の一番悪い時期には、私は動物を飼うべきではないと思います。もし、そういう病態で、その家で飼ってる動物がいるとしたら、絶対誰かほかの第三者が世話をしてやらなきゃいけない。そういう人がいないと、その動物にも悪いし本人にも悪い。ただ、飼っている動物がいるから死ねない、という人も確かに中には存在します。私の症例でも、何例かありました、動物が自殺をストップしてくれたという例は。

あと、認知療法というちょっと考えをやわらかくする療法なんかは、古典的な鬱の人は考えが固い人が多いので、新型鬱病はまた別なんでしょうけど、そういう古典的なメランコリー型の鬱病の場合は、例えば、人間がやらないようなことを動物がやってしまうということで、認知療法的なトレーニングみたいになる可能性はある。しかしやはり鬱になってしまったときは、何もしないでやっぱりごろごろして薬を飲んでるのが一番早く良くなるので、鬱イコール動物を飼う、というのは、危険だからやめたほうがいいと思います。

○司会

先生、そろそろ。

○横山

それでは、そろそろもう時間にもなってきましたので、最後は、JAHAの柴内先生に何かご意見を賜りましょう。よろしくお願いたします。

○柴内

何ですか。せっかく高齢者がゆっくりと自分はこの席にいたいと思っておりましたのに、少しこれは虐待かもしれせんよ。

実感としましては、やっどこまで来たなという気がしません。世界的にも日本も、本当に素晴らしい方たちがたくさん出られて、その努力のおかげだと思います。ただし、この動物を介在した活動というのは、先ほどもエビデンスの問題がいろいろありましたけども、基本的には動物とのつき合いが長くて理解し合ってた国は、もうよいものだというエビデンスはあるんですよね。ただ、そういうものがなかなか理解できなかつたり、新しい分野になると、それを追求しないと肯定できないといったようなことがあって、大変おくれたことも事実だと思います。

動物を介在した活動は、大きく分けて、動物介在活動、介在教育、介在療法と区別されますけども、その中で、動物介在療法と動物介在教育はそれぞれ医療の専門家、それから、教育の専門家が携わらなければその結果は出せないんですね。私は、動物の専門で参りましたので、たまたま海外で動物たちをこんなに素晴らしい存在として、人の分野に活用させていることをとてもうれしいことと思って日本に持ち帰りましたが、たくさんの動物側の飼い主、そして、ボランティアの方々のおかげで無事に来ているので、またこれをいい形で生かしていただける方もふえてるとは思いますが、結果としては、これを成立させるのは、医療関係者と教育関係者が本気で取り組んでくださらなければ結果は出せないんですね。やっど今その段階に来てるんだと、こう思います。

そういうことも踏まえまして、熱心な動物を育ててくださってる、ハンドラー、ボランティアの方たちや動物医療関係者の方たちの努力を明確にしていく。そして、動物たちをもっと人間のそばで人を支える存在として、そうですね、ともに暮らしていく。特に、この活動の中心は犬と猫ですから、犬と猫はもう……人間とのおつき合いの生活の結果、もう返せなくて、人間の社会だけで行く動物にした以上は、これから社会の一員として仕事を持ってもらっていいと思いますし、適正のある子は仕事を持ってもらう。そしてまた、適正のない子は、おうちでおなかを出して寝てても、家族にとっては素晴らしい存在なんですね。そんなふうに考えると、もうごく自然にこれから一緒にずっと永遠に生きていかなくてはいけない仲間との組み合わせは、もっともっと教育の場面でも医療の場面でも、当然、年が進めば進むほど必要になってきますので、専門家の方々の大いなる御努力をお願いしたいと思います。

以上ですけど、よろしいでしょうか。

○司会

柴内先生、最後にすばらしくまとめていただいて、また、我々、お頼りにして大変申しわけございませんでした。皆さん、お時間も随分過ぎまして、素晴らしいパネルと熱心な討

議をさせていただきましたこと、主催者として改めて御礼申し上げます。改めまして、御講演いただきましたアローン先生、山口先生、海野先生、そして、すばらしい座長をお務めいただきました横山先生に大きな拍手をお願いします。

私どもの活動ももう10年を超えまして、先ほどからお話が出ておりますように、青少年の更生、リードドッグ、いろんな先生方が来られて、自閉症の療育犬を育成されておられた先生の御講演もいただいたことがあります。たくさんの先生方がおっしゃることに1つの共通の言葉があると思います。それは、犬は人があけられない扉をあけてくれる。これは各先生方に共通するお言葉だったと思います。きょうの、先生方のお話もまさにそういうことであつたと思います。題名につけましたように、その可能性を探るということで、今、柴内先生からもお話がありましたように、動物たちと私たちが暮らしていく上で、さまざまな可能性をまた皆様と御一緒に考えていけたらと思います。

きょう、特に大変な長い通訳をしてくださいました、津田先生に改めて皆様大きな感謝の拍手をお願いします。

○津田

ありがとうございます。

○司会

私ども、「ヒトと動物の関係学会様」にご協力団体に、こちらに来ていただいております柴内先生にもアドバイザーを務めていただいておりますが、来年の7月19、20に、ICAC KOBE 2014 ということで、第3回神戸アニマルケア国際会議を予定しております。また、K n o t s のホームページの方で、今もう既にPRを始めておりますので、またそちらのほうもご覧いただきまして、皆様に人と動物のすばらしい未来に向けて御討議を一緒にさせていただければと思っております。どうぞ今後とも皆様よろしくお願ひいたします。

本日は、本当にありがとうございました。

皆さん、どうぞお気をつけてお帰りください。





りぶ・らぶ・あにまるず シンポジウム 2013

PTSD とアニマルセラピー

～その可能性を探る

— アローン・ワッサーマン氏をお招きして —

2013年

6月23日(日)

兵庫県民会館

福の間 14時開演

13時30分会場

入場無料

主催 ヒトと動物の関係学会／総合的セラピー研究会／公益社団法人 Knots

協賛 **ネスレ日本株式会社**  **ネスレピュリナ ペットケア**

協力 兵庫教育大学

後援 外務省／イスラエル大使館／神戸市／兵庫県獣医師会／神戸市獣医師会／兵庫県医師会／神戸市医師会／日本動物高度医療センター

北村 直人氏 Naoto Kitamura

学校法人日本医科大学相談役／日本獣医生命科学大学顧問・客員教授／
日本動物高度医療センター（渉外担当）取締役／日本総合的セラピー
協会会長／獣医学博士・獣医師



CGC of Nippon Medical School, Special Adviser and Guest Professor
of Nippon Veterinary and Life Science University,
Director of Japan Animal Referral Medical Center (JARMeC),
President of Japan Total Therapy Society (JaTTS),
PhD of Veterinary Medicine

ご挨拶 Greetings

日本総合的セラピー研究会 (JaTTS) は、あらゆるセラピー分野における専門家の方、直接現場で指導されている方、将来セラピー分野で活動を希望されて方、また、深い理解と協力を惜しまない等々の方々が、切磋琢磨し、より良いセラピーを求めることなどを目的に発足した研究会です。

今回、イスラエルのリハビリ心理士、アロン・ワッサーマン博士をお招きしてメンタルヘルスにおける動物の治療効果について、特別講演が実現できました。

この実現については、特に外務省・イスラエル大使館のご後援を賜り、また、チーム獣医療としての高度医療（2次診療）を通して飼い主のペットロスにも配慮している、農林水産省指定小動物臨床研修施設「日本動物高度医療センター」のご後援も頂いております。

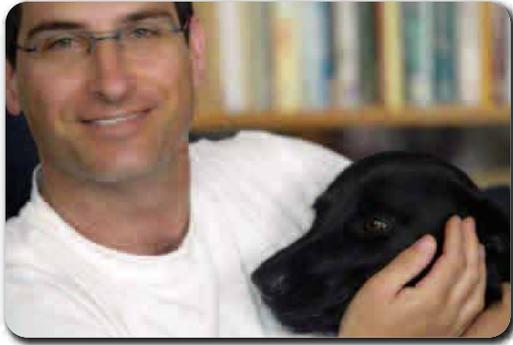
今後は、医療・獣医療・セラピーの融合により、より大きく力強いセラピー活動に発展されることを願い、現在セラピー分野でご活躍されてます。多くの皆様のご理解とご協力により実り多いシンポジウムとなりますことをご祈念申し上げてご挨拶と致します。



Japan Total Therapy Society (JaTTS) the study group for professional of all kind of therapy, clinical practitioner, students, and supervisor, which have been founded with trying to improve by learning from each fields.
This time, we can call on Dr. Alon Wasserman to Japan who is the clinical psychotherapist from Israel. He will talk and introduce about the effect of Animal Assisted Therapy.

Ministry of Foreign Affairs of Japan, Israeli Embassy, and Japan Animal Referral Medical Center (JARMeC) have facilitated the realization of this symposium.

After this symposium, we hope that we could go on much better Animal Assisted Therapy with co-operated from each field.



アロン・ワッサーマン博士 Dr. Alon Wasserman

リハビリ心理士／動物介在セラピスト：イスラエル
Rehabilitation Psychologist, Animal Assisted Therapist, Israel

自然災害の被災者

トラウマ後の患者の、セラピー犬との絆によるリハビリプロセス

Nature Catastrophe Victims:

The Rehabilitation Process of Post Traumatic Patients
with the Aid of a Therapy Dog

はじめに

職業的背景

私の仕事は、臨床心理士と講師です。私のクリニックでは、様々な年齢の様々な患者さんへの治療を行っています。軽・中度のライフイベントで苦しんでいる普通の患者さんをはじめ、トラウマ後の患者さん、頭部外傷の患者さん、死に至る病気を抱えた患者さんなどのような、重度の障害を持った患者さんもいます。

私のクリニックでは、私のペットとの絆が大きな意味をなしています。私は2匹のセラピー犬と1匹の猫を持っています。セラピーにペットを導入することは、私の専門の独特な部分です。

私はイスラエルのレブンスキー大学にて、動物介在セラピストのプログラムを教えています。学生たちは少なくとも2年間、次のことを関連させながら勉強しなくてはなりません。心理学、動物学、人間動物関係学、そして小児・成人との臨床治療学。

国家的背景

私はユダヤ人で、イスラエルに住んでいます。イスラエルの生活は、主に安全問題から、とても複雑になっています。ユダヤ人は、世界中から迫害された長い歴史をもっています。そしてこの65年間、イスラエル国家は近隣諸国とのたくさんの戦争をしてきました。これらの戦争により、多くの犠牲者が双方に生まれましたし、生き残った多くの戦士もPTSDを発症しています。戦争と並行して起こった多くのテロ攻撃は、市民たちをPTSDに陥れています。自然災害やほかの原因によるPTSDの患者もいます。

講演の流れ

- 1) PTSD：一般的な説明
- 2) サブ母集団：自然災害による被害者
- 3) イスラエルにおける動物介在療法(AAT)と、日本への提案
- 4) セラピー犬の役割

心的外傷後ストレス障害 (PTSD)

(人間の能力としての) 不安、不安性障害、そして PTSD の特徴を簡単にレビューしましょう。不安性障害には、パニック障害、恐怖症、強迫性障害、PTSD、そして一般的不安

が含まれています。

命が脅かされるようなことに会った患者は、大きな情緒的ストレスを経験します。

私的なこと(例えばレイプやアクシデント)もありますし、公共的なこと(例えば自然災害やテロ攻撃)もあります。

PTSDの症状には、トラウマの再体験(悪夢やフラッシュバック)、トラウマを思い出させることの持続的回避、持続的な過覚醒などがあります。一般的に関連してくる症状は、鬱状態、不安、そして認知的困難性です。

ここでは、抗し難い自然脅威によって、現実急に命が脅かされた一般市民に焦点を絞りましょう。身体的外傷や誰か愛しい人(たち)の喪失をする人もいます。

自然災害による被害者

普通の人生を歩んでいた男性や女性たち。彼らは普通の生活をし、普通の共同体に属していた人たちです。

そこに、命を脅かすような特別なことが起こり、それがトラウマになります(例えば、2011年3月11日の午後)。それには私的・国家的な特徴があります。

マスコミ報道は、リハビリのプロセスに影響します。

再度同じことが起こらない保証はありません。

【必要なことは…】

異なった領域に起こっている問題に対処するために必要なサポート

- ・心理的(不安、抑うつなど)
- ・行動的(回避、攻撃など)
- ・認知的(注意、記憶、構成など)

勉学や仕事、そして家族や友人との時間が欠けている場合、これらは困難となります。

【治療…】

- ・サポート、教育、対処メカニズムによる危機介入
- ・事象に関連したストレスへの暴露
- ・ストレスマネジメント、リラクゼーション
- ・認知技術を利用した多彩な対人精神療法
- ・薬物療法

動物介在療法 (Animal Assisted Therapy: AAT)

- ・人間と動物の絆の理解
- ・AAT の簡単な歴史
- ・セラピーに用いる動物について
- ・セラピーに犬を用いることの長所
 - セラピストは、犬の行動をコントロールする能力が必要である。犬はコミュニケーション能力が高く、情緒的な生き物であり、犬はセッションを好む。ちょうどよい大きさであり、数も豊富で、倫理的な問題もない。
- ・セラピー犬は、特別なセラピストが使用するために個々トレーニングされている。
- ・犬は、治療現場を、ひとつに結合させることができる。相互作用の三つのパートを一つにまとめ上げる。つまり「患者」「セラピスト」「犬」。
- ・セラピストの飼っている犬
- ・いくつかの、もしくはすべてのセッションに犬が存在する。
- ・存在するとしても、セッションすべてに犬がいる必要はない。
- ・セラピストが開始するときは…
 - 一緒に遊ぶー不安解消、気分向上、責任感、不穏行動のコントロール、共感能力の向上、など
 - 成人向けのプレイセラピーになる
 - セラピストが犬の福祉に配慮することが、役割モデルになる。
- ・犬は情緒状態に反応する：泣く、怒る、イライラ、躁的、喜び
- ・多くの PTSD 患者は、心理士のところに行くことに気が進まない。とても恐ろしい体験だと考える者もいる。イスラエルでは、動物介在療法師は、心理士でいる必要はない。心理学・教育学・ソーシャルワーク・言語聴覚士などの学位を持つ人たちへの AAT 免状を我々は発行している。そこで学ぶ者たちは、少なくとも2年間学ばねばならず、またスーパーバイザーのもとで、臨床実践をしなければならぬ。
- ・PTSD の患者が私のところにやってきて犬を見たとき、不安レベルは急激に下がる。トラウマ後の悪い状況を否定する患者も多いが、犬は感情表現を引き出すことに長けている。いい場合も悪い場合も。同時に、特に患者が破滅的な状態の場合、共感性の問題を持つ患者もいる。感情コントロール不能が一番の症状の場合、犬を呼んでもらい従わせるのが効果的である。会話の最中に犬を撫でていてもらおうと、部屋での緊張を和らげるのに役立つ。
- ・この講演において、2011 年の巨大地震と津波の被害者の PTSD という特殊な状況における PTSD 患者に対して、どういうふうに働きかければいいのかを、私は述べたい。こういう患者さんのニーズに立ち向かうのに、いかに犬の存在が役に立つかをお示したい。

Introduction

Professional background:

- ・ I work as a psychotherapist and as a lecturer. In my clinic I give service to a wide variety of patients of all ages. Starting from normal patients who are struggling with minor-moderate life events, through patients with severe disturbances such as post traumatic patients, brain injured patients and life threatening illness patients.
- ・ A major part of my clinical work is done with the aid of my pets. I have two therapy dogs and a cat. The embedding of the pets in therapy is a unique part of my expertise.
- ・ I teach at the program for animal assisted therapists at the Levinsky College in Israel. Students are enrolled for at least two years of studies which combines psychology, zoology, human-animal relationship and practical therapeutic work with children and adults.

National background:

- ・ I am Jewish and live in Israel. Life in Israel is very complicated mainly because of security problems. The Jewish people have a long history of prosecution all over the world, and in the past 65 years, the state of Israel had many wars with our neighbor countries. These wars left many casualties for both sides, and many soldiers who survived developed PTSD. Alongside to the wars, there were many terror attacks which left civilians with PTSD. There are also people who are suffering PTSD due to natural catastrophes and other causes.

Lecture Layout

1. Post-Traumatic Stress Disorder (PTSD): General explanation
2. Sub population: Natural Catastrophe Victims
3. Animal assisted therapy in Israel and implication to Japan
4. Roles of the Therapy Dog

Post-Traumatic Stress Disorder (PTSD)

A quick review of anxiety (as a human resource), anxiety disorders and the specifications of PTSD. Anxiety disorders include Panic Disorder, Specific Phobia, Obsessive-Compulsive Disorder, PTSD and Generalized Anxiety.

- ・ Patients have experienced a major emotional stress due to a life threatening event.
- ・ Private (e.g., rape, accident) vs. Public Events (e.g., natural catastrophes, Terror attacks).
- ・ PTSD Consists of: Re-experiencing the trauma (nightmares, flashbacks), Persistent avoidance of

reminders of the trauma, Persistent hypervigilance. Common associated symptoms are depression, anxiety and cognitive difficulties.

- Here we focus on civilians who were in real and immediate danger to their lives due to an overwhelming natural force. Some of them were physically injured and/or lost a loved one (or more).

Natural Catastrophe Victims

- Females and males across the whole life span, who have developed in a normal way.
- Who performed or took part in normal activities.
- The trauma was caused at a specific moment in life (e.g., the afternoon of March 11, 2011), and has personal and national characteristics.
- Mass media coverage influence the rehabilitation process.
- There is no guarantee that it will not happen again.

[Needs –]

Support is needed to cope with problems in different domains:

- Emotional (anxiety, depression, etc.)
 - Behavioral (avoidance, aggression, etc.)
 - Cognitive (attention, memory, organization, etc.)
- These difficulties cause lack of function at study, work and at home with family and friends.

[Treatment –]

- Crisis intervention with support, education and coping mechanisms.
- Exposure to stress related events.
- Stress management, relaxation.
- A mixture of interpersonal psychotherapy with cognitive practices.
- Medication.

Animal Assisted Therapy (AAT)

- Understanding the bond between mankind and other animals.
- A brief history of AAT
- Relevant Animals in Therapy.
- The advantages of dogs to therapy – the therapist's ability to control the dog's behavior, highly communicative and emotional creature, the dog enjoys the sessions, suitable size, abundance of dogs, no ethical issues.
- Therapy dogs are individually trained for the use of a specific therapist.
- The dog becomes an integrated part of the therapeutic setting, and a part of the communication triangle that interacts: Patient – Therapist – Dog
- Therapist's private dog.
- Present at some or all sessions.

- When present, not necessarily for the whole session.
- Initiations of the Therapist –
 - Playing together - reducing anxiety, mood uplifting, responsibility, controlling disturbing behavior, improving empathy ability, etc.
 - Play therapy suited to adults.
 - The therapist concern with the dog's well-being serves as role modeling.
- The dog's response to emotional situations – crying, anger and aggression, manic attacks, joy.
- One problem we have is that many PTSD patients are reluctant to go to a psychologist. Some of them think of it as very frightening experience. In Israel an Animal Assisted Therapist, does not have to be a psychologist. We have diploma AAT studies for graduates of BA in psychology/education/social work/speech therapists, etc. The students studies for at least two years and doing practical therapeutic work under supervision.
- When a PTSD patient comes to me and sees my dog – there is a sudden drop of the anxiety level. Many of them also deny their bad situation after the trauma, so the dog promotes expressing feelings in extreme – for the good or for the worse. Also, some of them have a problem with empathy, especially if one has a catastrophic reaction to his or her situation. When the sense of loss of control is a major feeling – it is over whelming to call a dog that comes and obey you. Also padding the dog while speaking, promotes relaxing in the room.
- In the lectures I will explain specifically how to work with PTSD patients, considering the special circumstances of the PTSD victims of the great earth quack and tsunami of 2011. I will show how the presence of the dog helps to tackle the needs of these patients.



男性サバイバーとのドッグセラピー Dog Therapy with Male Survivors

少年の頃の性的虐待を受けた男性とのドッグセラピーについてのテーマで発表する。まず、簡単に男性サバイバーの特徴について。そして、トラウマ、PTSD を理解するためにいくつかのモデルを紹介する。最後に、男性サバイバーにとって犬を介在させることがどのようにトラウマ回復につながるのかを説明する。

まず、性的虐待を受けると PTSD を発症することがかなり多い。そして、虐待が繰り返されると解離症状が強く、複雑性 PTSD となる。多くの男性サバイバーは過去のことがフラッシュバックになり、神経のシステムが過覚醒やシャットダウンという意味での解離が起こる。

そして、トラウマや PTSD を理解するに当たって、多重迷走神経理論 (Polyvagal Theory) を紹介する。この理論は何度も繰り返されるトラウマや虐待により、過覚醒と解離のシステムを繰り返し行き来することを説明している。その過覚醒と解離を、身体感覚に働きかけ、落ち着かせることでトラウマからの回復が可能になる。

最後に、犬の役割について。サバイバーが過覚醒や解離していると犬が何らかの反応をする。カウンセラーに気付かされるより、犬がサバイバーに教えてくれる。犬がクライアントの神経システムの鏡となる。そして、悲しみ、怒り、寂しさなどの感情のプロセスにも犬の存在が助けになる。実際の事例を多く挙げる。



I will talk about the dog therapy with the males who were sexually abused as children. First, the characteristics of male survivors are explained. Second, to further understand the trauma and PTSD, several models are presented. Lastly, how dogs can assist the recovery of trauma for male survivors is described.

First, many sexual abuse cases lead to PTSD. In fact, repeated sexual abuse induces dissociative symptoms and complex PTSD. Many male survivors have flashbacks of past trauma, and their nervous system become hyperaroused and shutdown.

Secondly, in order to understand the trauma and PTSD, the Polyvagal Theory is introduced. It explains that experiencing the repeated trauma and abuse leads the nervous system to be hyperaroused and shutdown continuously. Trauma recovery is possible if we can calm down such nervous system.

Finally, the role of dogs is discussed. When the survivors become hyperaroused or dissociated, dogs will respond in some ways. Rather than the counsellor points out, the dogs will let clients aware of their states. Dogs will be the mirror of client's nervous system. Furthermore, emotions such as sadness, anger, loneliness can be processed with the help of dogs. Many clinical cases are presented.



海野 干畝子氏 Chihoko Unno

兵庫教育大学 人間発達教育専攻 臨床心理学コース 准教授
Hyogo University of Teacher Education,
Graduate School of Education - Human Development Education,
Clinical Psychology, Associate Professor

被虐待児への動物介在療法 (ドッグプログラム) Animal Assisted Therapy (Dog Program) with Abused Children

発表者は、被虐待児童の愛着形成を目的にした犬による動物介在療法を実践したので報告する。対象は、情緒障害児短期治療施設の6歳から12歳までの小学生女子6名である。方法は、施設での支援内容に、ドッグプログラム介入群と、ドッグプログラム介入無群にわけて、その介入前後での被虐待児童の行動と情緒の様相について、質的量的に比較した。

ドッグプログラムの構成は、グループプログラムと個人プログラムに分かれており、個人プログラムは、犬一匹(筆者の所属犬)と児童、と施設職員1名が居る中で、被虐待児童への心理療法(インタビュー面接、思春期解離体験尺度の変法、生育史聴取)を行った。

結果については、施設職員へのインタビュー調査の結果の印象では、ドッグプログラム介入群は、ドッグプログラム介入無群に比較して、より早急な愛着形成と信頼関係の構築が可能であると示された。量的には現在分析継続中であり当日発表により報告する。

現時点の考察は、児童は、ドッグプログラム開始後、CDC(子どもの解離チェックリスト)の数値は増大し、その後、解離症状が消失、復活と循環した、9か月後地点で数値は低レベルで落ち着く、という変動の経過をたどった。このことから、ドッグプログラムが、より児童の身体と情緒に変動を与え、感覚統合が促進することが示唆された。



I will report the animal assisted therapy with dogs for the purpose of attachment formation of abused children. Clients are six elementary school girls age 6 to 12 year's old living in the residential care. The method employed was the qualitative and quantitative control study comparing pre and post AAT intervention looking at abused children's behavioral and emotional aspects.

The structure of this dog program is both the individual and group settings. The individual program is conducted with one dog (therapist's own dog), the therapist, and one residential care worker. Psychotherapy for abused children includes intake, life history interview, and dissociation assessment (using adolescents Dissociative Experience Scale).

The result was obtained from the interview of the residential care workers. It indicated that the experimental group, compared to the control, showed quicker attachment formation and building of trusting relationship.

In discussion, it was observed that the abused children's CDC (children's dissociative checklist) score has increased (means higher dissociation) right after the dog program, then soon after dissociation level went down. After going up and down of dissociation level, eventually after 9 months of program, the dissociation level was low and stable. From this observation, it is possible that sensory integration is facilitated as a result of transforming children's body sensation and emotion through the dog program.

パネル・ディスカッション

Panel Discussion



◎ 横山 章光 (よこやま あきみつ) 氏

精神科医／帝京科学大学アニマルサイエンス学科准教授／ヒトと動物の関係学会常任理事／日本総合的セラピー研究会副会長

帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科准教授。精神科医(精神保健指定医、精神科専門医)。産業医科大卒。共済立川病院、神奈川県大和市立病院、防衛医科大学校を経て 2005 年から現職。動物やロボットを医療に取り入れる研究・活動を行なっている。人間と動物の心理的關係についての論文多数。著書に「アニマル・セラピーとは何か」(NHK出版)など、訳書にフランク・アシオン著「子どもが動物をいじめるとき:動物虐待の心理学」(ビイング・ネット・プレス社)、ゲイル・メルスン著「動物と子どもの関係学:発達心理からみた動物の意味」(ビイング・ネット・プレス社)、監修にアラン・ベック他著「あなたがペットと生きる理由—人と動物の共生の科学」(ペットライフ社)、メロピー・パブリクス著「自閉症のある人のアニマルセラピー」(明石書店)がある。

Dr. Akimitsu Yokoyama

Associate Professor of Department of Animal Science, and Psyciarist.

Dr. Akimitsu Yokoyama is the Associate Professor of Department of Animal Sciences at Teikyo University of Science. And he is a Psychiatrist (a designated psychiatrist and a certified psychiatrist). After graduation from University of Occupational and Environmental Health Japan, he had worked at National Hospital Organization Tokyo Medical Center, Federation of National Public Service Personal Mutual Aid Association Tachikawa Hospital, Yamato Municipal Hospital, National Defence Medical College Hospital. And from 2005, he have worked at present post. Also he had studied and researched about “Relationship between human and animal” involving Animal Assisted Therapy from the psychiatric view for over 20 years. He have written about lots of literatures and articles about this field, and taken the post of the board of Society for the Study of HUMAN ANIMAL RELATIONS(HARS) and the vice-president of Japan Total Therapy Society(JaTTS).



◎ アロン・ワッサーマン (Dr. Alon Wasserman) 氏

アロン・ワッサーマン博士は、イスラエルのリハビリ臨床心理士(PhD)であり、神経心理学者であり、動物介在セラピストである。彼は学生たちに指導するとともに、多分野のセラピストに実習を行っている。彼の興味はメンタルヘルスに対する動物の治療効果であり、それは 2000 年に PTSD と頭部外傷青年たちへの治療から始まった。それ以来、長年に渡って、対象となる患者層は広がっている。その経験を生かし、講義やセミナーを世界的に行い、イスラエルでは様々な学術機関で教えている。テルアビブのレビンスキー大学が彼の拠点である。イスラエルの AAT 誌である「動物と社会」の編集委員でもある。

Dr. Alon Wasserman

Dr. Alon Wasserman is an Israeli Rehabilitation Psychologist (PhD), a Neuropsychologist and an Animal Assisted Therapist (AAT). He combines practical work with teaching and mentoring students and other licensed therapists. His interest in the healing power of animals, to human mental health started at the year 2000, through the therapeutic work with post traumatic and brain injured young adults. Since then, the scope of his patients widened both in populations and in ages. He shares his experience via lectures and seminars around the globe, and by teaching in various academic institutions in Israel. His main place of teaching is the Tel-Aviv Levinsky college of education, at the Animal Assisted Therapy studies, and he is a full editorial member of Animals and Society - the Israeli Journal for AAT.



◎ **山口 修喜 (やまぐちのぶき) 氏**

サイモンフレイザー大学 (カナダ) で心理学を学ぶ。同大学で修士号取得 (カウンセリング心理学)。
ブリティッシュコロンビア州の公認心理カウンセラーとなる。
性被害を受けた男性の支援センターでカウンセリングを経験
2011 年カナダより帰国
神戸で男性サバイバーのためのカウンセリングオフィス Pomu を立ち上げる。カナダのエドモントン
で AAT の研修を受け、サバイバーと AAT を行っている。

Dr. Nobuki Yamaguchi

Counselling Office Pomu for the male survivors of sexual abuse

I studied psychology at Simon Fraser University (Canada), and received master's degree in counseling psychology. I then became licensed clinical counsellor in the state of British Columbia. I was employed at the BC Society for Male Survivors of Sexual Abuse. In 2011, I permanently moved to Japan, and opened the private practice for male survivors (counseling office pomu). In Edmonton, Canada, I attended the workshops of AAT. I have been working with male survivors using AAT.



◎ **海野 千畝子 (うんのちほこ) 氏**

兵庫教育大学 人間発達教育専攻 臨床心理学コース 准教授
静岡大学大学院教育学専攻 修了
静岡県の公立学校で養護教諭として 10 年間勤務後、臨床心理士の資格をとり、静岡県総合教育センター、あいち小児保健医療総合センターにて、こども虐待対応臨床に従事、2010 年より現職に至る。
専門はこども虐待対応臨床、現在の研究は、被虐待児童への愛着形成を目的とした動物介在療法の研究
を実践している。

Dr. Chihoko Unno

Hyogo Education University, Human development educational faculty, Clinical Psychology Course Associate Professor. Master's degree in Education from the Shizuoka University

As a nurse teacher, after 10 years of working at the public school in Shizuoka Prefecture, I obtained the clinical psychologist license. I then worked with abused children at the Aichi children's General Health and Medical center. From 2010, I have been at the Hyogo Education University. My main research is the Animal Assisted Therapy for abused children's attachment.



◎ **津田 望 (つだのぞみ) 氏**

1986 年、英国ロンドン市大学大学院修士ディプロマ修了、臨床言語伝達学専攻。
同年、「全英圏臨床言語士資格 (M.R.C.S.L.T)」取得、臨床言語士。

Dr. Nozomi Tsuda

1986 Graduated from London City University (Post-grad diploma of Clinical Communication Studies)
Member of Royal College of Speech & Language Therapists
Speech & Language Clinician

富永 佳与子 Kayoko Tominaga

公益社団法人 Knots 理事長
Chairperson, PIIA Knots



謝辞

Thank You Message

この度、ここ神戸に、アローン・ワッサーマン先生をお迎えして、PTSD という課題に、動物達の関わる可能性を皆さまで考える機会を得ることが出来ましたことは、この方面で研究をなさる方にとっても、震災の経験を持つ神戸という街に取りましても、大変有意義なことと存じております。

アローン・ワッサーマン氏の招聘に尽力され、この貴重な機会を与えて下さいましたヒトと動物の関係学会様、日本総合的セラピー研究会様、横山章光先生、津田望先生、ご講演を下さいました山口修喜先生、海野千畝子先生に心より御礼申し上げます。特に津田先生には、ワッサーマン先生の日本滞在中の通訳もお引き受け下さり、大変なご尽力を本当に有難うございました。

また、私共の活動に深いご理解を賜り、いつもご支援を下さいますネスレ日本株式会社ネスレピュリナペットケア様、そして、兵庫県、神戸市、兵庫県獣医師会様、神戸市獣医師会様、兵庫県医師会様、神戸市医師会様の皆さまの常なる温かいお心にも深く感謝致しております。

皆様方の想いを受け、様々な問題に立ち向かっておられる方々の希望に満ちた明日への一助になりますことを希求致しております。



It is a great honor to welcome Dr. Alon Wasserman to provide us with a valuable opportunity to consider the involvement of animals in the field of PTSD. The topic is also highly meaningful for the city of Kobe which itself experienced a large earthquake disaster.

We at PIIA Knots would like to express our gratitude to the Society for the Study of Human Animal Relations, the Japan Total Therapy Society, Dr. Akimitsu YOKOYAMA, and Dr. Nozomi TSUDA for their efforts to invite Dr. Alon Wasserman I would also like to thank Dr. Nobuki YAMAGUCHI and Dr. Chihoko UNNO for being speakers. In particular I would like to thanks Dr. TSUDA for acting as interpreter for Dr. Alon Wasserman during his entire stay in Japan.

We would also like to thank Nestle Purina PetCare who have always supported us, and Hyogo Prefecture, Kobe City, Veterinary Association of Hyogo Prefecture, Kobe City Veterinarian Association, Hyogo Prefecture Medical Association, and Kobe City Medical Association for their cooperation and understanding.

I know with confidence that the result of your efforts and generous consideration will project a beacon of hope to a great many people facing and challenging various forms of hardship.

Thank you.